TOHOKU GAKUIN ARCHIVES

# 東北学院資料室

LIFE
LIGHT
LOVE

Vol. 8
2008.12.31

**仙臺神學校**

1891（明治24）年完成。当時日本でも非常にめずらしい本格的欧風建築様式を取り入れ、赤煉瓦造りのモダンな外観が話題を呼びました。建物は、木骨煉瓦造2階建、窓は尖塔アーチのゴシック風で、城郭意匠が加えられています。1945（昭和20）年7月10日仙台大空襲で焼失。

学校法人 東北学院

# CONTENTS


ごあいさつ

「東北学院資料室」第8号発行にあたって　星宮　望 ……1

寄　稿

押川方義　そのひと(一)　河西　晃祐 ……2

杉山元治郎と日本農民福音学校運動(一)　岩本　由輝 ……5

「独創開発」にかけた萱場資郎の生涯　鶴本　勝夫 ……13

回　想

資料室の一冊のアルバムが語る
創立80周年記念「マイフェアレディ」公演　吉川　清隆 ……19

資料紹介

鈴木義男に関する新資料　仁昌寺 正一 ……22

所蔵資料紹介

仙台神学校の礎石 ……28

「敬神愛人」の書 ……29

ケルカー記念図書館(写真) ……30

2008年行事

東北学院創立122周年記念式 ……31

榴ケ岡高等学校体育館・管理棟献堂式 ……33

第9回ホームカミングデー『同窓祭』……34

教養学部創設20周年記念式典・同窓会設立 ……37

東北学院文化講演会2008 ……38

博物館起工式 ……39

クリスマス ……40

2008(平成20)年時事 ……42

2008(平成20)年受贈資料一覧 ……44

2008(平成20)年資料室来室状況 ……45

東北学院の沿革 ……46

東北学院資料室規程 ……52

# 「東北学院資料室」第8号発行にあたって

東北学院長　星宮　望

東北学院資料室は、2001（平成13）年5月の創立記念日に土樋キャンパスのラーハウザー記念礼拝堂地階に設置されて以来、約7年半が経過いたします。この間、多くの同窓生、学生、生徒や一般の方々にご利用いただいてまいりました。

東北学院資料室では、キリスト教（プロテスタント）主義に基づく学校教育を目指し、1886（明治19）年に創立された「仙台神学校」時代から今日に至るまでの東北学院に関する歴史を伝承するとともに、「建学の精神」に関連する貴重な資料を収集・保存・展示し、東北学院の発展に寄与したいと考えて活動を続けてまいりました。

現在、当資料室では所蔵する貴重な歴史資料全体の中から記録として価値が高いと思われる写真などを抽出し、データベース化を進めております。資料のデータベース化は東北学院創立以来の貴重な歴史的資料の散逸や劣化を防ぐためにも有効な手段であると考えますし、また、資料室を利用される方々にとってもこれまで以上に写真や資料の利用・検索が容易になるものと思われます。今後は、写真のみならず、貴重な手紙、文献記録などもデータベース化されることが期待されます。

平成20年度における東北学院の歩みの概要を記します。1月には、土樋キャンパスの礼拝堂を中心とした景観が仙台市から都市景観賞として表彰されました。2月には21世紀の東北学院大学の方向性を明らかにする第一歩の改革として、平成21年4月から実施される経済学部の改組（経営学部新設など）について記者会見を開催し、公表いたしました。3月には同窓会東京支部が創設100周年を迎え、記念祝賀会が盛大に行われました。5月には大学の地区オープンキャンパスが秋田市と青森市で開催され、来年度は八戸でも開催される予定になっています。6月には平河内健治第15代理事長が就任しました。7月21日にタイ国の泰日工業大学と国際交流協定を締結しました。8月には東北学院大学が代表校となって申請していた連携事業計画が文部科学省の「戦略的大学連携支援事業」に採択され、仙台圏の13の大学と4つの短大が国公私立の枠を超えて新たな連携事業として展開しようとしております。9月1日には榴ケ岡高校の長年の念願であった新体育館と管理棟の定礎式・献堂式がとり行われました。10月4日には恒例の第9回ホームカミングデーが盛大に開催され、多くの同窓生や教職員との交流が図られました。また、10月18日には教養学部創設20周年記念式典が挙行され、教養学部同窓会が誕生しました。11月22日には、こちらも恒例となりました第6回「東北学院文化講演会2008」が今回は秋田県同窓会3支部から選ばれた25人の実行委員の協力を得て秋田市で開催され、本学の大塚浩司副学長の「最近のコンクリート事情」と題した講演が専門性の高いテーマであったにも拘らず、わかりやすいお話であり、卒業生ばかりでなく官界・業界の方々を含めて多くの一般参加者の方々を魅了しました。12月4日には東北学院大学博物館の起工式を行いました。

本資料「東北学院資料室」は、東北学院資料室そのものとともに本学の教育・研究活動をより広く地域社会に知っていただくことにお役にたつことを願っております。そして、東北学院資料室ではこれからも創立時代から今日に至るまでの東北学院に関する歴史を伝承し、「建学の精神」を後世に伝えてまいりたいと思っております。

# 押川方義　そのひと（一）

東北学院大学文学部准教授
河西　晃祐

「基督者」、「実業家」、「伝道者」、「国粋主義者」、「代議士」、「亜細亜主義者」、そして「学祖」。

幕末の動乱期に生を享け、明治・大正期という近代日本の激動の時代に、東北地方のみならず朝鮮半島、「満州」、樺太までを活動の場として駆け抜けていった押川その人を、「学祖」という側面だけに絞って見てしまうのは、どうも「忍びない」と云わざるを得ない。

押川と親交の深かった大隈重信がそうであったように、当時の「教育者」の中には、現在我々が想定し得る姿を、やすやすと超えていく人物がいないではなかったが、押川の関わった活動の幅もまた、到底「教育者」としての一側面のみでは捉えきれない「時代性」を背負ったものに他ならなかった。以下、ごく簡単にではあるが、明治期までに押川が関わった活動の幅を紹介していきたい。

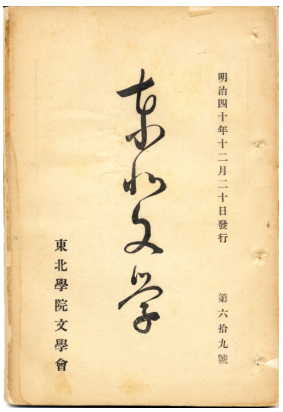
## 1. 基督者・伝道者・教育者時代

押川方義は1850（嘉永2）年、伊予松山に生まれたが、1869（明治2）年には藩派遣の江戸・横浜留学生として上京、幾多の学校を経て1872（明治5）年にはJ.H.バラから洗礼を受けることになったのであった。

その後、新潟伝道時代を経て仙台に移り、1881（明治14）年に国分町1丁目に仙台教会を設立、ドイツ改革派教会の宣教師であったW.E.ホーイの支援を得て1886（明治19）年5月に仙台神学校、同年9月に宮城女学校を設立するに至る。そして1889（明治22）年から翌90（明治23）年にかけてのアメリカ外遊を経て、帰国後の1891（明治24）年に仙台神学校を改称して、東北学院を誕生させたのであった。

創設期の東北学院には、広く知られているように山川丙三郎、酒井勝軍、島貫兵太夫、川合信水、押川方存（春浪）らが学生として学び、島崎藤村が教鞭を執った時期もあったように、現在から見れば「文学的叙情」ともいうべき自由な雰囲気をまといながら、仙台の地に教育の根を下ろしていくことになったのである。しかしながらその一方で、この後の押川の眼はさらに遠方に注がれ、「日本」を超えていくことになっていったのである。

## 2. 伝道者・教育者・亜細亜主義者時代




『東北文学』

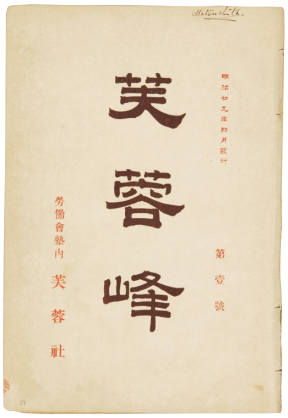
1894（明治27）年12月発行の『東北文学』（東北学院文学会発行／藤一也『押川方義』110頁）第7号には、「如何にして朝鮮を発達せしむべきや、これ当今の一問題なり。押川院長は之に就き先づ教育より籾めて彼等の根底より改革せざるべからずとの意見を以て、本多、巌本等の諸氏と相謀り海外教育会なるものを設立せんため過般上京されし」とある。

押川が次の関心を寄せていった「大日本海外教育会」が発足したのは、まさに日本が朝鮮半島をめぐって清国と兵火を交えている最中に他ならなかった。押川はこのときから、伝道と教育、そして近代日本の対外進出と軌を一にする形で、積極的に政治にも関わっていったのである。

1896（明治29）年、渋沢栄一、大隈重信等の援助を受けた大日本海外教育会は、朝鮮半島において「京城学堂」を開校した。押川はその副会長としてその設立に関与し、日本基督教会福島教会牧師であった渡瀬常吉を、京城学堂二代目の堂長として送り込み、学堂の運営にも関わっていったのである。

当時は、韓国（大韓帝国）においては、甲午開化派とよばれる新官僚が、日本や欧米の近代化をモデルとしながら、独自の教育改革を行おうとしていた時代であった。例えば1894（明治27）年には韓国政府内に学務衙門という教育選管部署が設置され、小学校・中学校・大学校といった一般学校と、外国語学校などの専門学校の設置が決定され、将来の教員養成のための師範学校などの設立も開始されていたのである（柳永益著／秋月望・広瀬貞三訳『日清戦争期の韓国改革運動』168頁）。

そのような中で、押川はあえて「朝鮮政府の掣肘を受けざる」京城学堂を開設し、「皆暗に日本の威信を盾として、将来の好運を祈り居る」学生を集め、日本軍守備隊の便宜を得て、現役陸軍少尉らの指導の下に日本式兵式体操をとりいれるというカリキュラムを敷いていったのであった（東北学院労働会機関誌『芙蓉峰』13号、1897年）。



『芙蓉峰』

押川の考え、大日本海外教育会の狙いがどこにあったのかは、さらなる検討の余地があるが、少なくともその時期とは、日本政府が韓国政府の一応の「主権」を認めつつ、宣教活動を本格化していたアメリカ、そして後にその覇権を争って戦うことになるロシアの進出を押さえるために、日本式教育を朝鮮半島に扶植せんとしていた時期に他ならなかった。

そのような中で、韓国政府のみならず欧米諸列強からの反発も招きかねない日本政府による直接の関与ではなく、一民間団体が経営する体裁を取ることが可能であった京城学堂の役割とは、日本軍部の協力をも得ながら、日本語のみならず日本人と同じ身体規律も身につけた「親日派」韓国人勢力を扶植せんとする活動を行うことにあったと捉えることができよう。（そして同学堂は1905（明治38）年、伊藤博文の韓国統監就任という、まさに日本による朝鮮半島支配が政府レベルで可能となる直前まで活動を行い続けていったのであった。）

そしてこの大日本海外教育会との関わりによって、押川はその活動をさらに中国大陸へと拡大していくことになっていった。東北学院院長の職にあった押川は、1900（明治33）年7月30日から、いわゆる「義和団」事件を契機として戦火を拡げつつあった北清事変下の日本軍を「慰問」するために清国に渡り、同地で翌1901（明治34）年4月までを過ごすのである。

表向きは日本軍の「慰問」という形を取ってはいたものの、それはいわば建前に過ぎず、押川は実際には同地において、「清国皇族学校」の設立や「清国子女教育」を目的とした大日本海外教育会の学校施設を中国大陸に拡張すべく活動していたのであった。

当時の状況とは、日清戦争に敗れた清国を舞台に、列強がその経済権益を争う一方で、アメリカからの布教団体や、各国の支援を受けた各種学校が盛んに文化的進出を計っていた時期であった。押川の狙いとは、その対象をいずれは清朝政府の実権を握るであろう「清国皇族」にまで広げることで、先の京城学堂以上の影響力を持つであろう「親日勢力」を清国内部に扶植せんとすることにあったと考えられるのである。

しかしながら、院長でありながら、仙台から遠く離れて行われていた、押川のこのような活動は東北学院院長としての責務との兼ね合いがつくはずもなく、1901（明治34）年5月、押川は遂に学院長の立場を追われ、伝道の道からも外れていくことになったのであった。

## 3. 実業家・亜細亜主義者時代

東北学院長辞任後の押川は、教育・伝道活動からも離れて亜細亜主義者、実業家としての活動へと向かうことになっていくのであるが、その中でもそれまでは宗教家としてのみ知られていた押川の名前を、広く世間に知らしめることになったのは、「朝鮮利権」問題であった。

ことの起こりは、1905（明治38）年3月に逮捕された韓国人李逸植が、ある「勅書」を所持していたことにあった。韓国皇帝の玉璽までもが押されたその勅書の内容とは、押川らが、李太王高宗から韓国国内における塩・煙草の専売、田野の開墾収税などといった権益の譲渡を認められたという衝撃的なものであったのである。

この問題の詳細については、未だ明らかにはなっていない点はあるものの、押川個人の活動にはとどまらず、背後には大隈重信や伊藤博文も関与していた形跡が強いものであったが、少なくともこの押川

の行動は、1904（明治37）年5月に閣議決定していた「対韓施設綱領」にも抵触し、日本政府の「韓国経営」にも影響を与えかねないとして、外務省の強い反対によって頓挫したのであった。

しかしながら、同問題への関与は、押川のその後の人生を大きく動かしてしまっていった可能性があるのである。というのは、同問題の経緯は、『萬朝報』を通じて広く世間に伝えられてしまい、その結果、「（押川）先生の一行は韓国皇帝を籠絡し、其大利権を得たかの如く伝えられてゐると共に、其目的が単に利権屋の利権漁りと同様に曲解されてゐる」（大塚栄三『聖雄押川方義』98頁）という事態を招くことになったからであった。「かつての著名な宗教家」から「利権屋」へ、世間の評はその後の押川の生涯を陰のようについて回っていくことになる。

同問題が頓挫した後、押川は福島県磐城炭山、岩手県黄金沢金山などの鉱山開発に手を伸ばすが、何れも華々しい成果は見なかった。1909（明治42）年、かつて東北学院で教鞭を執り、教育と伝道に意を注いでいた時代の押川をよく知っていた島崎藤村は、当時の押川について次のように述べている。

> **「目的とする処と自分の今の仕事を分けて考へる人は、例へば押川方義先生や巌本善治先生などの今日の生活は其れであらう。詰り今やってゐる事（金を儲けるとか事業を企てるとか）は真の目的でなくつて、夫れを手段として目的を果たそうと云ふ様な考へで居られるらしい。（中略）押川巌本の二先生の如き『我が目的は他にある』と思ひながら今日の仕事を軽く見て其の日々々を送られてゐると云ふ風に見受けられる。この事を考へて見ると非常に悲惨の感じを起させる。私などはずっと以前から二先生をよく知って居るので今日になって殊にこの感が深い。」（「文学断片」『基督教世界』1909年7月15日号／藤一也『押川方義』199頁）**

伝道と教育、その根を確かに仙台の地に残したはずの押川は、その後、根無し草のように政界をさまよい歩き、ついには満州に渡り、樺太へと向かうのである（続く）。

【参考文献】

大塚栄三『聖雄押川方義』（押川先生文書刊行会、1932）
藤一也『押川方義――そのナショナリズムを背景として――』（燦葉出版社、1991）
森山茂徳『日韓併合』（吉川弘文館、1992）
柳永益著／秋月望・広瀬貞三訳『日清戦争期の韓国改革運動』（法政大学出版局、2000）

**河西 晃祐プロフィール　KAWANISHI, Kosuke**

1972（昭和47）年生まれ。
上智大学文学研究科博士後期課程修了。
立命館大学非常勤講師、東北学院大学講師を経て現職。

# 杉山元治郎と日本農民福音学校運動（一）

東北学院大学経済学部教授
岩本　由輝

## 1. 日本農民組合の設立と杉山元治郎

杉山元治郎は、1922（大正11）年4月9日の日本農民組合創立大会において初代組合長（間もなく中央委員長と称する）に選ばれている。そして、1926（大正15）年3月5日、日本最初の合法的無産政党である労働農民党が結成されたとき、杉山はその中央執行委員長に就任している。しかし、左右の思想の対立のなかで、土地国有論をめぐって「一部社会主義者、共産主義者の間に称へられてゐるが、今日の如き経済組織の下に六ヶ敷、レニンの主義は失敗したから、失敗するものと認めておかう」（1921〈大正10〉年10月8日の救済事業研究会における「農業労働者に就て」と題する講演での発言）と公言してはばからない杉山は、左派の人たちから“生ぬるい”とみなされ、1917（大正6）年11月のウラジミール・イリッチ・レーニンの指導するロシア革命によって成立したソビエト社会主義連邦共和国のなかに“人類の輝ける未来”を見出そうとする人々からは、レーニンを批判するなど、とんでもない思いあがりとばかりにドン・キホテーテ扱いされ、あげくに“ダラ幹”（堕落した幹部）という悪罵さえ浴びせられていた。そこには非合法下におかれていた日本共産党の影響が強く存在したのである。ただ、ソビエト連邦が崩壊した現在、ロシア革命の4年後に、「レニンの主義は失敗した」と公言した杉山の態度に思想史的に関心が寄せられているが、社会正義を実現するためにはデモクラシーが欠如した社会主義であってはならないという信念を杉山は一貫して持ち続けるのであり、そのデモクラシーの内容とは、“自由、平等、平和、親愛、犠牲、協同、奉仕”という7つの実践道徳をさし、それは人道的キリスト教的社会主義のなかに求められるということを、1957（昭和32）年7月に行なった「労働組合と信仰」と題した講演で主張していることも知っておくべきであろう。なお、杉山は、前出の救済事業研究会における講演のなかで、折からの大正デモクラシーの思潮に触れながら、農村では小作人が地主に人格的従属を強いられている事実を指摘し、「如何に都会でデモクラシーの何の彼と申しましても農業労働者がこんなことでは駄目であります。国民一致協力歩調を一にせねばなりません」といっていたことにも注目する必要がある。

しかし、1920年代の当時、杉山のこのような考え方は、杉山を“生ぬるい”とみたり、“ダラ幹”とののしる人たちからは理解されなかった。また、杉山も自分の考えを変える必要があるとは思いもしなかった。そうなれば、杉山にとってもはや組織を去る以外の選択しかないことになる。

まず、1926（大正15）年12月7日の労働農民党第4回中央委員会において、杉山は中央執行委員長の辞意を表明し、12月13、14日の両日にわたって開かれた労働農民党第1回大会が終了したところで、杉山は一身上の理由ということで、中央執行委員長を退任する。この時点では、労働農民党大会は満場一致で退任した杉山に感謝状を贈っている。このあと、杉山は、12月9日に結党されていた日本労農党に加わることになる。

つぎに、日本農民組合であるが、左派の台頭するなかで、中央委員長の杉山を支持する人々は、杉山が1927（昭和2）年1月14日にみずから結成した日本農民組合の中央委員長を辞職すると、1月24日に日本農民組合堅実派同盟を組織する。それと行動を共にすることにした杉山は、それまで住みこみで職務をつとめていた日本農民組合総本部のある大阪市此花区江成町（現福島区野田）を去り、2月1日付で、

### 移転通知

**謹啓　時下寒中御見舞申上げます。**

**私は日本農民組合総本部内に長らく居住致して居りましたが、去日、左記へ移転致しましたから御通知申上げます。**

**宝塚行きの途中でありますから是非御立寄りを願ひます。**

**序ながら申上げます。私の日本農民組合中央委員**

長を辞しましたのは戦ひに疲れたからではありません。組合に嫌気をさした訳でもありません。一部の人々と歩み方を異にしたからであります。併し蒔いた者は苅らねばならぬことを承知して居ります。組合創立者の責任は決して廻避致しません。或時期には皆さんのために充分働かして頂くことを明かに声明致します。今暫くは休養と、著述と、福音の事業と農村消費組合のため精進致します。先は取敢ず右御挨拶まで。怱々敬具。

昭和二年二月一日

兵庫県武庫郡瓦木村高木東

（阪急電車西宮北口駅下車）

杉山元治郎

という文面の挨拶状を出している。

杉山が居を定めた兵庫県武庫郡瓦木村高木東（現西宮市高木東町）には、1926（大正15）年10月に賀川豊彦がすでに居を構えており、実は杉山宅と賀川宅とは隣り合うことになった。挨拶状のなかで、杉山は、農民組合創立の責任者としての責任は回避しないと述べ、時期が来たら充分に働かしてもらうとしたうえで、しばらく休養したいといっているが、その休養はほとんど行なわれることはなかった。それは日本農民組合堅実派同盟を組織した人々が、1927（昭和２）年3月1日、全日本農民組合を結成し、杉山をその組合長にかつぎ出したからである。

## 2. 農民福音学校の設立と杉山元治郎

この間、杉山は、休養中といいながら挨拶状のなかで述べている福音の事業を進めるための準備にとりかかるが、それは杉山が日本農民組合中央委員長を辞職した直後の1927（昭和2）年1月19日に、賀川が杉山を説いて結成した日本農村伝道団の事業にかかわるという形をとって行なわれた。そして、日本農村伝道団は、全日本農民組合が発足した3月1日に、

我々は日本農村の宗教的改造と建設をなさんがために、左の事業を行なひます。

一、農民福音学校の開設（農閑期に開校）

二、文書伝道（伝道用パンフレット雑誌発行）

三、講師派遣（神学校、都市教育その他への要求に応じて）

四、農村伝道（直接伝道後援）

五、農村セツルメント事業の普及

右の目的を実現せんがため、日本農村伝道団の趣旨に共鳴する人々の協力をもとめます。

本団の目的に賛成する人々は、

一、維持会員（年額五円以上納付するもの）

二、普通会員（年額一円を納付するもの）

となることが出来ます。会員に対しては、時々会報を配布し、連絡をはかります。

入会希望の方は左記宛御申し込み下さい。

兵庫県武庫郡瓦木村高木東二三八

杉山元治郎方

日本農村伝道団

昭和二年三月一日

という趣意書を発表する。日本農村伝道団の理事には、杉山元治郎、賀川豊彦、吉田悦蔵、村島帰之、小島渙三、矢部喜好、吉田源治郎の5人が就任している。そして、この趣意書の日付以前の1927（昭和2）年2月11日に早くも趣意書の一にある農民福音学校を開設している。杉山にはあとでみるように福島県相馬郡小高町（現南相馬市小高区）の日本基督教会小高教会の牧師時代に小高高等農民学校を経営した経験があり、賀川が杉山の存在を知ったのも、小高高等農民学校についての沖野岩三郎による紹介を通じてのことであった。ただ、今回、名称を高等農民学校ではなく、農民福音学校としたのは、「神を愛し、隣人を愛し、人を愛する三愛主義がイエスの福音の精神であるから、これを真向正面に押し出すこと」と、対象を「農民に重点をおくというところ」にあったからであると、杉山はいう。

杉山は、日本農民組合を全国的な組織として設立しようとしていたとき、日本農民組合の重要な事業の1つとして、この種の学校の開設を考えていた。そのことは、杉山が1921（大正10）年12月8日、日本農民組合の設立をマスコミにはじめて明らかにしたときの談話をみれば明らかである。杉山の談話は12月12日の『大阪毎日新聞』と14日の『大阪朝日新聞』に載っているが、とにかく前者の記事には「将来農民組合の幹部たるべき農夫養成のため簡易なる農民学校を起し」と、その目的について具体的に言及しているのである。しかし、1922（大正12）年4月9日の日本農民組合の創立大会以降、左右の対立が激化するなかで、杉山は念願の農民学校をなかなか開設することができなかったというのが現実であった。そこで、杉山は1927（昭和2）年1月14日に日本農民組合中央委員長を辞任すると、賀川が1月19日に結成した日本農村伝道団の事業に積極的にかかわり、その事業の1つに農民福音学校の設立をおき、日本農村伝道団の趣旨書を公表する3月1日以前の2月11日にすでに農民高等学校を瓦木村に開設し、賀川家の裏にあった8畳ほどの小屋を使い、宿舎には杉山家の建物をあて、杉山はその向いに小さな家を

建てて移っている。

ここで杉山は、日本基督教会小高教会の牧師時代に開設した小高高等農民学校についてみておこう。

### 3. 小高高等農民学校と杉山元治郎

杉山は1909（明治42）年3月29日に東北学院専門部神学科別科を卒業するが、卒業前の2月14日に仙台市東六番丁にあった日本基督教会東六番丁教会が総会において満場一致で杉山を牧師として招聘することを決定したことを承け、東六番丁教会牧師となり、2月21日から正式の牧師として説教を行なっている。ただ、3月になって教会から受け取った報酬は3円であった。聞いてみると、それは2か月分ということで、月割にすれば1円50銭である。5月13日に風邪を引いたとき、「医者に見するに金子なし」と書かねばならない有様であった。杉山には、「月給一円五十銭の牧師」という肩書がついてまわるが、それはこの時期の話なのである。とにかく満足な食事もできない。信者たちも気の毒がって、「昼頃になると家に来て飯を食わないか。夕食頃になると私の家に来ないか」という塩梅で、各戸廻り持ちで養われている始末であった。こうしたことから、杉山は健康をそこね、9月20日の日記には「身体熱を覚えてだるし」と書き、9月25日に医者にみてもらうと、ジフテリアかも知れないといわれ、それでは人前に出られないということで、牧師の代役にしばらく東北学院在学中の後輩出村剛と大月（のち中村）清次を頼み、礼拝と説教をしてもらっている。ジフテリアではないということは間もなくわかるが、このあとも相変わらず、夜になると熱が出る状態に変わりはなかった。10月に入って牧師としての礼拝と説教を再開するが、当時、仙台で名医といわれた虎岩医院院長の虎岩頼重のところに意を決して行ってみる。何回か通院するうち、10月13日に虎岩からサナトリウム療養をするように勧められた。病名は告げられなかったが、これは杉山にとって衝撃であった。その日の日記に杉山は「国木田氏に対して内村氏より……国のために泣き給へ、自身のために泣き給ふな」といったということがあったと書いている。実は、これは、1908（明治41）年6月23日に神奈川県茅ヶ崎のサナトリウム施設において肺結核で生涯を終えた国木田独歩にあてた内村鑑三の見舞の手紙の文章に由来するものであり、それを日記に書いたことは、杉山が自身も肺結核にかかったと判断したからであることは間違いのないところである。とにかく、当時、肺結核は不治の病として恐れられていた。事実、杉山は肺結核の初期症状といわれる肺浸潤にかかっていたのである。

10月14日に東六番丁教会長老の山岸嘉兵衛に郷里の大阪府泉南郡北中通村（現泉佐野市）下瓦屋に帰るために牧師を辞任することを告げる。そして、身辺整理をし、11月4日に仙台を去って帰郷し、大阪市南区南綿屋町（現中央区島之内１丁目）の長春病院で診察を受けたところ、「肺尖がいかれている。少しで取り返しのつかぬことになる」といわれ、大阪府大島郡浜寺村（現堺市）の石神病院を紹介される。石神病院では、「肺病問答」という本を貰い、「敵を知るは勝算の基、病を知るは癒る基なり」と励まされ、自宅から通院するうち、石神病院の処置のよろしきを得て、微熱も出なくなってきた。翌年1月に入ると、石神病院からもう毎日来なくてもよいといわれ、1月31日から3月2日まで和歌山県東牟婁郡田辺町（現田辺市）や同県西牟婁郡瀬戸鉛山村湯崎（現白浜町）の湯崎温泉酒井屋旅館で転地療養を行なう。2月中旬を過ぎると身体をもてあますぐらい元気になる。杉山はもともと丈夫な人であったようで、こうして肺浸潤を克服したのである。

その後、しばらく生家で静養をし、5月10日、仙台に戻り、5月14日に帰仙の挨拶に東北学院長ディヴィット・ボーマン・シュネーダーを訪ねると、シュネーダーから日本基督教会小高教会に牧師として静養も兼ねて赴任することを勧められる。仙台では週に1回、宮城病院（現東北大学付属病院）に行き、診察を受けているが、6月に入ってもう心配することはないといわれたので、小高教会に赴任する決意を固める。ジャーマン・リフォームド・ミッションから受け取る給料は月26円であった。そして、7月17日に小高教会牧師として着任する。

小高教会といっても信者は数人で、教会堂はなかった。そこで、当面、下宿先である小高町南小高字町48の林フヂ宅を教会として使用することにした。林フヂは小高教会の数少ない信者の1人であった。11月16日、杉山は、この間、話が進んでいた東六番丁教会信者の中村こひの娘ことと11月16日にシュネーダーの司式のもと東六番丁教会で結婚式を挙げている。ことは杉山が東六番丁教会牧師としての最後の礼拝と説教を行なった1909（明治42）年10月31日に杉山から洗礼を受けた者であるが、その母こひは、月給1円50銭の牧師時代にいろいろと杉山の身辺の世話をしてくれた信者の1人で、杉山の日記にしばしば「中村の小母さん」として登場する。

小高には、東北学院三校祖の1人であるウィリア

ム・エドウィン・ホーイから洗礼を受けたという数人の古い信者がいたが、教会堂もないような始末であったから、もちろん無牧状態にあった。彼ら古い信者は、杉山の着任を喜んで迎えてくれたが、すでに老齢化していた。日曜の礼拝に出てくるのも大変なことを知った杉山は、しばしば彼らを家に訪ねると同時に、新しい信者の獲得を行なわなければならなかった。しかし、陸奥中村藩相馬氏が1611（慶長16）年に中村（現相馬市）に居城を移すまで、1323（元亨3）年以来、城館おいていたという伝統を誇る小高の人たちに25歳になったばかりの杉山が布教を行なっても耳を傾ける人は皆無であった。とにかく、熱心なもとからの信者数人と毎週日曜日の礼拝を続けるのが精一杯であった。ただ、日曜学校に来る子供たちが20人、多い日には30人というのがせめてもの救いであった。

信者以外の大人が教会に訪れることはほとんどなく、道で杉山とすれ違うとき、「耶蘇、味噌、糞」といったことばを投げつける者も一人や二人ではなかった。それでも杉山は東北学院時代に野外伝道をするため組織したクロッス隊を標榜して、小高町内を一人で太鼓を叩いて行進し、「野外伝道を思の通りやり、効果如何は知らざれども、主の教を述べたのは感謝に堪えず」と日記に書きとめるような日々を送らなければならなかった。

杉山の布教活動は相馬郡鹿島町（現南相馬市鹿島区）にも及び、日本基督教会鹿島教会（現日本基督教団鹿島栄光教会）の基礎づくりもやり、数人の信者と日曜学校の出席者30人ほどをえている。また、相馬郡八沢村（現南相馬市鹿島区）の八沢干拓地には毎週水曜日に出かけて祈祷会を行なったが、ここでは入植者の出席が多く、杉山を喜ばせており、1911（明治44）年12月11日には八沢浦講義所の献堂式がクリスマスの祝会を兼ねて行なわれるなど、予想外の収穫があった。これはどこでもいえることであろうが、小高町にしても、鹿島町にしても保守的な地方での布教の難しさは、住民の菩提寺に対する遠慮にあることを杉山は気付かされる。ところが八沢干拓地の場合、入植者は移住者で、その出身地はまちまちであったから、当面、菩提寺との関係を考えなくてもよかったのであり、また、入植者としていろいろな悩みを抱えていることも杉山には分ってきた。干拓事業の施行者が地主であり、入植者は小作農であることからする対立の様相も杉山の目にみえてきた。そのとき、杉山は、自分も小作農の子であるという意識が頭をもたげてくる。杉山は生れついての小作農の子といっているが、正確にいうと、杉山が生まれる1年前の1884（明治17）年7月31日、折から松方正義が財政再建のために実施した緊縮政策である、いわゆる松方デフレのもとで、祖父杉山茂平の名義で所有していた田畑20筆6反8畝19歩のうち、抵当に入れていた田6筆1反8畝23歩を失ない、金主から直小作させて貰うようになったのを手始めに、間もなく宅地132歩を含め、すべての土地を失ない、借地借家層となっているのである。ちなみに、杉山の祖父は、もともと千石船の船頭でかなり羽振りがよく、利益が出れば土地を集積し、その土地を担保に事業をやるということを繰り返してきたが、明治維新後、千石船が衰退し、かわって水車で精米をやったり、硝子の原料の硅素の粉末を作ったり、地引き網漁をやったりしたことが裏目に出たのであると杉山はいっている。杉山は1885（明治18）年11月18日の生まれであるが、杉山の記憶は、結局、家屋敷まで手放すことになった地引き網漁の舟に祖父に乗せて貰ったことから始まっている。そして、地引き網に失敗してからの杉山の家には、それまで出入りしていた人たちもあまり顔をみせなくなって淋しい思いをするようになったと杉山は述懐している。5歳のとき、生母が亡くなっている。

ところで、毎日、“荒野の叫び”のような野外伝道を続けていた杉山に転機が訪れた。それは杉山が土地を借りて葡萄を植えたことから始まった。杉山が野外伝道をやっているとき、小高の町外れの飯崎（はんざき）というところに萱場（かやば）というよりも原野のようになっている荒地があった。よさそうな土地なのに、どうして耕地にしないのかと聞いたところ、幕末に中村藩が導入した二宮尊徳の仕法で実は水田として開発したが、水保（も）ちが悪く、とうとう水田にすることができなかったため、放置されたままになっているという話であった。要するに、ざる田とか、かご田といわれる土地であるが、東北学院に入学する前、甲種農学校である大阪府立農学校（現大阪府立大学農学部）を出て、和歌山県会の技手兼書記を務めた杉山は、そういう水はけのよすぎる土地には、果樹、とりわけ葡萄を植えればよいということを知っていた。下宿の隣家が、そこの土地の所有者の1人であったので、聞いてみると、そこに生える萱を売って年に反当5円の収入があるということであった。杉山が、その土地2反歩を年10円で貸してくれないかといったら、喜んで貸してくれた。杉山は、そこに葡萄のほか、桃や梨を植えてみたところ、よく育つのである。もちろん、果樹は桃栗三年といっても、

成果はすぐにはみえないが、杉山はそこに野菜も植えてみた。玉葱とキャベツであるが、それらをこの地方に最初に持ち込んだのは杉山であるといわれている。そういえば、杉山の郷里は泉州玉葱の本場である。近くの農民たちは、はじめのうちは、“耶蘇坊主が何をやっているか”という目でみていたが、野菜の方はすぐに成果がみえてくる。“二宮先生がもてあました土地で玉葱がとれた”ということは、農民にとって驚きであった。それに出まわりはじめた化学肥料などを使って、農民をびっくりさせている。そのうち、“あの牧師さんは大阪府立農学校で勉強した人だ”という噂が広まるようになる。そうなると、それまで杉山に会っても、口を開こうともしなかった農民がおずおずと声をかけてくる。化学肥料のことを聞いてくる人があるので教えてやると、買って来て使ってみる人も出る。ただ、何に何をやればいいということを考えないで、化学肥料を使って失敗する人もいる。そういうときは、杉山は窒素・燐酸・加里という肥料の三要素について説明し、それらの施肥のタイミングを教えてやったりもしたが、その成果はすぐに現われ、何人もの農民に喜ばれた。また、農民が化学肥料をやっているところをみると、いままでの堆肥や下肥の感覚で、肥料過多になり、かえって不稔障害を起こすこともあったが、杉山は肥料には適量があることを教えてやった。杉山の施す肥料の量が、農民の目からみてあまりにも少ないので危ぶむ向きもあったが、杉山の方から、“私のいうとおりやって収穫が減ったら、私が一升買おう、そのかわりうまく行ったら、私に正月中に餅を一升ついてくれ”というかけをしかけたら、その農民が、“牧師さんのいうとおりやったら、肥料代が減って収穫が増えた”といって約束の餅をもってきてくれた。

杉山は、こういう形で地域の人々になじんで行ったわけであるが、そのうちに、「人を集めっから、耶蘇の話は抜きにして農業の話をやってくだれ、とくに肥料の話をして貰えっと、ぜえんだけど」という虫のいい注文をしてくる農民も現われた。そういうとき、杉山は快く引き受け、出かけて行った。そうすると、話を聞きつけて他からも同様な依頼がつぎつぎと舞いこんでいる。農民としては有能な農業改良普及員を身近にえたようなものである。実際に田畑に行き、作物の様子をみて、“ここにはマグネシウムをやりなさい”とか、“石灰を撒くといいですよ”という指導が実に的確であった。とにかく杉山が自分で借りた畑で実践しているのであるから、説得力があった。杉山自身も農業で生計を立てる自信がついてきた。健康もすっかり回復したし、農業をすることが健康によいこともわかってきた。

こうなると、日曜学校の子供を引き連れてクロッス隊の野外伝道をやっても、うさんくさい目でみる人はいなくなり、“寄ってお茶を呑んでおんなれ”と声をかけられるようになってくる。4月18日、杉山は青年会夜学校の規則書を作っている。これは2月7日に小高尋常高等小学校校長高野亀治郎からの農閑期に農村青年に農業を学ばせたいという依頼にもとづくものであったが、小高農民高等学校はここに始まるといってもよいであろう。

10月になると、杉山は空屋になっていた小高町南小高字町48の旧医院の建物を借り受け、そこを教会として林フヂ宅の下宿を引き払っている。そこにミッションの福島県監督宣教師をつとめるクリストファ・ノッスがしばしば訪れるようになる。ノッスは杉山の伝道活動を非常に高く評価しているし、杉山もまたノッスに好感を抱きつづけるが、東北学院に入学する以前から日本人の信仰はミッションを離れて日本人自身で行なうべきであるとする独立自給伝道に共鳴していた杉山は、この頃から独立自給伝道を模索しはじめる。キリスト教界におけるある種のナショナリズムであろうが、杉山もミッションから月給をえて伝道を行なうことをいさぎよしとしなかった。

12月11日から16日まで仙台に行ったとき、東北学院での同級生で、杉山の後任として東六番丁教会牧師をつとめている菅井喜七を訪ね、菅井と「教会の前途、独立伝道に就き協議」するが、そのあと東北学院を訪れて教授の梶原長八郎と会ったとき、「按手礼問題で喧嘩」となり、杉山は「独立伝道する」と口走っている。杉山は、東北学院2年生のとき、梶原が講義において、「近来、説教は思想に傾き、十字架を遠ざかりつつあり」と述べたことに感銘し、「十字架を離れし説教に何等の益なく、ただ美音のみ」と日記に感想を書くなど、梶原に傾倒していたが、杉山が2年生の3学期にクロッス協会を組織し、野外伝道を展開することに批判的であったことから、何となく反りがあわなくなっていたところに、按手礼をめぐって衝突することになったのであろう。その日の日記に、杉山は梶原について「表によき事を云ひ、裏に誹謗する人」ということを書きつけている。この梶原との衝突と関係があるかどうか分らないが、杉山は東北学院長のシュネーダーから手紙を受けとっている。ただ、日記にはその内容は書いてないが、杉山の自伝を含む伝記である『土地

と自由のために－杉山元治郎伝－』（杉山元治郎刊行会、1965）には、シュネーダーから、ミッションの本部において杉山を小高教会よりもっと大きい教会に転任させるか、それともアメリカに遊学させるかを検討しているので、どちらかを選べという手紙を貰ったことがあったと書き、それはもっぱらシュネーダーの好意によるものと感謝の念を示している。手紙を貰った時期はいつと書いていないが、杉山が1913（大正2）年1月にミッションに辞表を出し、独立自給伝道に入っていることをみれば、1912（大正元）年12月30日に受けとったシュネーダーの手紙はこのことに関するものであろう。杉山はシュネーダーの好意によるといっているが、杉山が独立自給伝道をすると口走っていると梶原がシュネーダーに告げ、シュネーダーが杉山が小高教会にいることに不満を持っているのかと判断してミッションと話し合っての好意であったのではなかろうか。

しかし、杉山はシュネーダーの人事にかかわる好意については謝しながらも小高を離れる気にはなれなかった。1912（明治45＝大正元）年4月18日に規則書を作製していた青年会夜学校への志願者があり、農閑期に入った11月14日に開講したばかりであった。数は少なくとも学びたい人間がいれば、それを見放すわけには行かないし、また、何人か英語を勉強したいと訪れる者もあり、杉山は自分に寄せる地域の人々の期待を裏切りたくはなかった。そうなれば、ミッションの転任命令を拒否しなければならない。そこで梶原との喧嘩で口走った独立自給伝道を本気で考える必要が生じてきた。牧師として地域の人々に農業に関する知識を教えることは自分にしかできないのである。八沢浦講義所に集う人々のことも念頭にあった。

杉山は、1912（明治45＝大正元）年の日記の余白に、「明治四十五年、大正元年を送る」という、一文を書き、そのなかで、

> **伝道に於ても着々と農村に歩を進め、彼等と日に新しくなるは、是れ又、主の御恵み。主よ、主が此世にゐませし時、村々を経廻りて、伝道なし給ひし如く、愚かな僕にも此の業をなさしめ給へ。主よ、永遠に貴重なる伝道と農業の職にたづさはらしめ給へ。主よ、僕は、あなたの召し給ふ日まで、此の光栄ある業をなさんことを願ふ。若し、此考にぶらば刺を与へ給へ。**

と述べている。ここにはシュネーダーを介してのミッションの好意的な転任あるいは留学の勧奨を退け、小高において農民とともに農業を行ないながら、自給伝道を行なうことの決意が示されている。

杉山は1913（大正12）年1月にミッションに辞表を提出し、受理されたものの、独立自給伝道ということになれば、とうぜんみずから生活の資を稼ぎ出さなければならない。そのとき、杉山は農業を行なう決意を固め、借地の物色を始め、2月5日には葡萄や野菜をすでにつくっている飯崎の土地の所有者のところに行き、さらに借り増しができないかと交渉している。しかし、杉山がこの不毛と思われていた土地に葡萄を植え、また、野菜を作って目にみえる成果を挙げていたので、所有者も自分でもやってみたいという気持が出てきたらしく、借り増しは難航する。9月になっても、杉山に土地を貸してくれる人は出なかった。杉山は水田よりも畑を借りたかった。その方が自分がやりたい作物を栽培するのに都合がよかったからであるが、荒地として放置されていたようなところでも、それは水田として使えなかっただけで、杉山のやり方をみて、また、杉山に教えられて葡萄を植えたり、野菜を作れることが分ったから貸せないといわれたのは、何とも皮肉であった。みな小高に来て農業を通じて親しくなった人たちだけに杉山は苦笑を禁ぜざるをえなかった。それでも杉山は会う人ごとに土地の借り入れを頼んでいる。

12月22日には、小高教会のクリスマスにシュネーダーを招いているが、シュネーダーは杉山がシュネーダーの勧めを断わって独立自給伝道をはじめたことを認め、喜んで小高教会を訪れ、クリスマスの祝会に参加している。

杉山が独立自給伝道を進めるにあたって必要な土地の確保については、1914（大正3）年に入って間もなく、小高町片草地内に、田2反歩、畑1町歩を貸してくれる人が出たことによって解決した。3月になると、杉山は郷里の下瓦屋から父と義母、および2人の義弟を呼び寄せ、自分たちの住む教会とは別に片草に一軒家を借りて住まわせる。なお、義妹は杉山が結婚して間もなく引き取って一緒に生活していたが、この頃、仙台市の宮城女学校（現宮城学院大学）に入学させている。とにかく、父と義母が年老いて来たので、杉山は長男として一家をまとめる必要が生じたからであるが、まだ元気な父は農業を手伝ってくれた。そのさい、1町2反の借地のうち、畑が1町と多かったことは父の野菜栽培技術を生かすのに都合が良かった。付近の農民たちも杉山とは別に、杉山の父から東北の農業とは異なる温暖な泉州の農業の話が聞けるのを喜んだ。父にとっても、

知らない土地での生き甲斐となったようである。

そうしたなかで、10月27日に前年11月から始めていた青年会夜学校を、いよいよ私立学校として設立する認可願を福島県知事太田政治に提出し、間もなく認可されているが、認可願に付した明細書によれば、

> **第一　目的　本校ハ基督教主義ニ基キ精神的教養ヲ行フト同時ニ、農業上ノ実際的知識ヲ授クルニアリ**
> **第二　名称　本校ハ私立小高農民高等学校ト称ス**
> **第三　位置　福島県相馬郡小高町字南小高第四拾八番地内ニ置ク**

とある。こうしてキリスト教主義にもとづく小高農民高等学校が11月1日から発足したのである。修業年限は「二ヶ冬季」とし、毎年11月1日に始まり翌年4月1日までの農閑期、授業時間は毎日午後1時から3〜4時間とした。当面、教職員は校主であり、校長の杉山1人であったが、入学金として「金一円」、授業料として「一ヶ月金五拾銭」であり、入学金と授業料で経費をまかない、不足の場合は「校主私財ヲ以テ之レニ充ツ」としている。

杉山は小高農民高等学校を構想するにあたって大阪府立農学校時代の恩師で、当時、愛知県碧海郡安城町（現安城市）の愛知県立農林学校（現安城農林高等学校）校長の山崎延吉に相談してデンマークの国民高等学校に範をとることにした。デンマークの国民高等学校制度は、デンマークのルター派神学者で、詩人でもあったニコライ・フレデリック・セヴェリン・グルントヴィ（杉山はドイツ語読みしてグルンドウィッヒと呼んでいる）が創設したもので、東京帝国大学農科大学助教授である那須皓が翻訳したA・H・ホルマンの『国民高等学校と農民文明』（同志社、1913年12月）によって日本にも紹介されていた。

杉山の小高農民高等学校について沖野岩三郎は、1918（大正11）年11月刊行の雑誌『雄弁』第9巻第12号（大日本雄弁会）所載の「日本基督教会の新人と基事業」においてとりあげているように、

> **彼は更に大きな面白い計画を実行しつゝある。夫は彼の創立した『小高農民高等学校』である。農民高等学校といふのは北欧丁抹にある学校の真似で、学校と云ふものゝ組織立つた学校では無い。冬の間百姓仕事の出来ない雪降の季節だけ開校するので、十二月の半から四月の半まで四ヶ月間毎晩開講する。月謝は五十銭でしかも夫は米でも麦でも薪でも何でも宜いのである。生徒は毎年二三人から十人位の少数ではあるが、毎晩教会の講堂で講義のノートを写したり、種んな質問をしたり、火鉢を囲んで面白く可笑しい事を語り合ってゐる中に農業一般の知識を得させるのであつて、実際の力が農学校出身と同程度だと認定された時が卒業で、今までに十五人の卒業生をだしてゐる。此の卒業生は悉く家に帰つて、習つた学問知識を実地に応用するので其時肥料や土壌に就いて疑問が起れば直ぐ杉山の所へ質問に出かけたり手紙を飛ばしたりする（『雄弁』9ー12、79〜80頁）。**

というものであった。

杉山は、講義の内容について3冊の本を刊行している。すなわち、

『農村経営の理想』（洛陽堂、1915年7月）
『農家経営の実際』（洛陽堂、1916年8月）
『農家経営実地応用互用論』（小高農民高等学校発行・クロッス社営農部発売、1917年10月）

のとおりである。

杉山と小高農民高等学校を紹介した沖野は、杉山が和歌山県農会に務めていた頃に通っていた日本基督教会和歌山教会の副牧師であったが、杉山ら若い教会員を集めて幸徳秋水と堺利彦によって刊行されていた『平民新聞』の読者グループを組織していた。そして、その読者グループが『真紅』という同人雑誌を刊行したとき、杉山が発行人となっていた、日露戦争のさなか催された『真紅』刊行祝賀演説会で登壇する弁士がかわるがわる非戦論を唱えたことが大問題となり、演説会の主催者と目された杉山は和歌山農会を結局去ることを余儀なくされ、東北学院に学ぶことになったわけであるが、沖野も和歌山教会副牧師を止めて明治学院に入学した。そこで沖野は賀川豊彦と同級生になる。沖野は明治学院を卒業後、和歌山県東牟婁郡新宮町（現新宮市）の日本基督教会新宮教会（日本基督教団新宮教会）の牧師となるが、1910（明治43）年5月に幸徳秋水（伝次郎）らが天皇暗殺を企てたみなす悪辣なクレームアップである大逆事件において、一味として逮捕された大石誠之助が新宮教会員であったことから、同教会は家宅捜索を受け、一時期閉鎖となり、以降、沖野には尾行がつくということになった。1917（大正6）年から沖野は日本ゆにてりあん協会牧師となっていたが、前出の記事は沖野が尾行を連れて小高教会を訪れたときに取材したものであった。この論稿において沖野は日本キリスト教界の新人として共通の友人である賀川と杉山をとりあげ、この2人を結びつ

けようとはかったのであり、賀川は、早速、1919（大正8）年1月刊行の『救済研究』第7巻第1号において、

> **今日最も必要なことは成人及青年に、冬季の休農期に、農民学校を興して、農場化学なり、自然趣味なり、農業経済学を教授すべきであらうと思ふ。日本では杉山元治郎君が、高等農民学校を一つ興して居るだけで、その他はまだこの設立を聞かない……（『救済研究』7ー1、47〜8頁）。**

と述べ、注目している。

この間、杉山は、1916（大正5）年11月まで、小高教会の新たな教会堂を建設するために小高町南小高字町87番地（現小高教会所在地）に土地を入手し、1918（大正7）年5月14日に始鉋式を行ない、6月15日に竣工移転している。

杉山の小高農民高等学校を評価したのは賀川だけではなかった。天野藤男も1920（大正9）年9月刊行の『斯民』第15編第9号（中央報徳会）所載の「郷土文明の発揮と地方改良」において、

> **氏は小高町に住居する正に十年、あらゆる困苦と戦つて教会堂を設立し、此に日曜学校を設け、町民及び附近農民に教界の霊光を宣伝すると共に、地方開発の使命を力説し、冬期間を機して、短期の講習会を開設し、地方子弟の教化に力めた。純然たる基督教宣伝者に非ずして農学校出身にして地方改良を使命とせる氏の立場に特色がある……（『斯民』15ー9、43〜4頁）。**

と述べている。

杉山が小高町を中心とした地域農民に画期的な貢献をしたものに杉山式互用犂の考案があった。小高町を含む相馬郡では1905（明治38）年以来、歴代郡長の指導によって耕地整理と暗渠排水が進み、その結果としての乾田化の進行にともない、牛馬耕の導入が農民の緊急の課題となっていた。杉山は農民たち、あるいは小高農民高等学校に来ている生徒から牛馬耕の導入について相談を受けた。農民にとって牛馬耕用の市販の犂が高価で、入手が困難ということもあったが、しかも、その犂は無床式無反転の持立犂であったから、土を一方にしかすき返せず、一うねすき返すごとに空戻りして、つぎのうねのすき返しをしなければならない能率の悪いものであった。そこで器用でものづくりの好きな杉山は、町内岡田の山田鍛冶屋の山田市之助にみずからの考案した往復ともに同方向にすき返せる互用犂を試作させてみた。1916（大正5）年6月上梓の前掲『農家経営の実際』のなかで、杉山はみずからが考案した互用犂について言及しているので、試作は1915（大正4）年にさかのぼるものと思料する。1916（大正5）年10月29日の日記に、「馬耕の売行きよく、朝より多忙なり」とあるから、この頃から実費で値段が安いということもあって売れ出したのである。そこで杉山は特許局に特許申請を行なっているが、先願者があり、12月20日と21日に特許局に赴き、その指導で実用新案登録の申請に切り替えている。そして、実用新案登録証を獲得したので、1917（大正6）年1月14日の日記に、「岡田の山田鍛冶屋にて、夕方まで馬耕の将来に対して協議する」とあり、杉山式互用犂の製造を実費で販売することを条件で山田にまかせている。その後も3月22日の日記に「正午より岡田の鍛冶屋に至る。馬耕を考案したるが、今一つとつての処にて具合悪し。夜になつて帰宅、併し其欠点が解る」とあるように改良に努力している様子が窺える。杉山から製造をまかされた山田は、みずからも杉山互用犂をベースに実用新案登録証をつぎつぎと獲得し、福島県内の農器具業界において重きをなすことになる。

このように小高教会牧師として地道な活動を行なっていた杉山について、沖野の前掲記事によってもっと広い舞台で働かせようとする動きが出て来て、杉山が小高教会牧師を辞して大阪に行き、賀川と意気投合し、日本農民組合の結成に向うのである。ただ、天野の杉山を紹介した前掲記事のなかで、天野は杉山が行なっていることを賞讃したあとに、その杉山が、

> 教界に於ては、稍々継子扱ひされてゐるとは真か（前掲『斯民』15ー9、43頁）。

と記しているところは気になるが、天野のこの記事が書かれた翌月である10月4日に新教会堂の建設に要した費用の精算を終えた杉山は小高教会牧師をやめて小高町を去り、東京で沖野に会ったあと、10月7日、救世軍大校である中根峯吉が用意していた大阪府東成郡生野村（現大阪市生野区）にあった大阪市の孤児収容施設である大阪市弘済会育児部舎監兼農場主任の職に就くべく大阪に着いたのである。

**岩本 由輝プロフィール**　IWAMOTO, Yoshiteru

1937（昭和12）年生まれ。
東北大学経済学部卒業。
山形大学人文学部講師、助教授、教授を経て
東北学院大学経済学部教授となる。

# 「独創開発」にかけた萱場資郎の生涯

東北学院大学工学部教授
鶴本　勝夫

## 1. 東北学院と仙台に対する貢献

萱場資郎が東北学院に、そしてふるさと仙台に対して果たした功績は大きく、それぞれが深い意味を持っている。その代表的なものは、

⑴ シュネーダー記念・東北学院修養道場敷地を寄付（宮城県宮城郡七ヶ浜花渕浜28の1）、昭和15年7月。

⑵「高山樗牛瞑想の松」記念碑建立。（仙台市青葉区小松島に立つ。現在、東北薬科大学が管理）昭和16年6月。

⑶ 東北学院に奨学金「萱場賞」を創設。基金に1万円寄付。昭和17年7月。

⑷ 萱場製作所仙台製造所を創設。萱場式オートジャイロの生産拠点とする。（仙台市長町八本松3、同工場を東北学院航空工専の実習工場に供与。戦時下、航空工専の動員学生200名受け入れ。）昭和18年6月。

⑸ 東北学院航空工業専門学校の創設に尽力。萱場資郎の軍、政及び教育関係の人脈が功を奏す。（後の東北学院大学工学部創設の礎となる。）昭和19年4月。

⑹ 東北学院同窓会東京支部長を務める。（東北学院の存立、運営につき種々提言。）

などが挙げられる。

本誌では萱場資郎の「独創開発」の原点とその展開について辿ってみる。

## 2. 萱場家の系譜

萱場家の起源は、後鳥羽天皇（文治・建久年間、1185年）の頃、鎌倉の北条家の家臣であった。鎌倉幕府滅亡後、奥州に下り信夫郡萱場の庄（福島県信夫郡）にあったが、戦乱の世、元亀・天正年間（1670年）の頃、陸前名取郡郡山の城主粟野大膳大夫成国（禄高7、8万石程度）の家臣として仕えた。粟野大膳病死後、伊達政宗が岩出山から仙台に進出した折、これに対抗したが敗れた。萱場家は一時若林にあったが、伊達政宗の出城別邸構築のためさらに追われ、荒井村高屋敷に隠れ住んだ。帰農して荒地を開墾、近郷中の豪農となった。

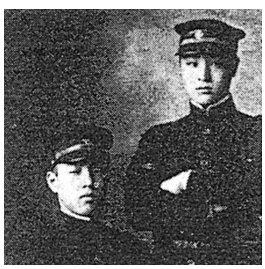
萱場家隆盛の道を開いた第8代萱場半四郎は、才知に優れ、時の代官に認められて荒浜村の肝入となった。碁をたしなんでいたため、経世学者林子平が釣魚に来たとき、碁を囲み親交を深めたという。林子平はしばしば萱場家に宿泊し、交流の証としてオランダ銅貨1個、ギヤマン盃、伊達家下賜の木杯（竹に雀と縦三引両の紋付）1個を与えたという。

## 3. 萱場資郎の出生

萱場資郎は明治31（1898）年4月1日、萱場家第12代富次郎と、よさの次男として仙台市荒井畑中でうぶ声を挙げた。代々萱場家では半四郎を襲名していたこともあり、当初「萱場四郎」と名乗っていた。【昭和18（1943）年1月1日、45才のとき「萱場資郎」と改名。本誌では「萱場資郎」で記述。】母のよさは、萱場家第11代利兵衛の長女で、仙台市穀町の若生万吉の次男富次郎を婿に迎え、萱場家第12代目を相続させた。

## 4. 東北学院中学部に入学、道すがら種々考案

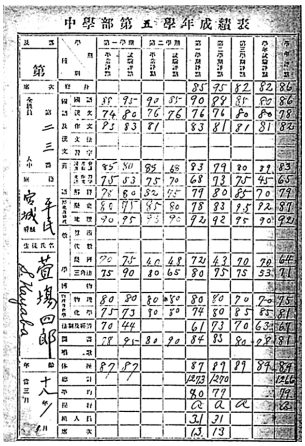
初等教育に関しては、初め仙台市荒井尋常高等小学校に通学した。しかし、身体が弱く休学することが多かったという。勉学にも力がはいらず、父母は先案じする状態であった。そこで「ゆとりある教育」で定評のあった東北学院中学部に通学させることにした。東北学院は当時、良家あるいは中産階級の子弟を集めて教育する「品のよい学校」と見られていた。これはキリスト教による教育環境が背景にあったためと思われる。


東北学院中学部在学時の萱場四郎（右）

生家は東北学院より東に約4㎞離れており、当時としては珍しい自転車通学をしていた。道すがらどこからともなく犬が出てきて、噛みつかれたという。萱場資郎はこれを排除するために、「犬たたき棒」を考案した。これは自転車後輪の泥よけフレームの両脇にスプリングを取り付け、そ

の先端に棒がついている。ひもを引くと、これが直角に動いて犬をたたくというものである。仕掛けは簡単であるが「発明する芽」が育ち、「ものづくりの楽しさ」を感じとっていった。

後の記録によれば、萱場資郎は機械工作に優れ、日々工作に没頭することが多く、当時既に自転車を改良して水上艇を作ったとある。この第１号機は、仙台市霞の目にある陸上自衛隊駐屯地の資料館「飛翔」に寄贈され、展示されていたとあるが、現在はない。


中学部第五学年時の成績表

東北学院中学部に在学中は、比較的「品のよい生徒」であったという。成績は、中程度と見受けられる。日頃仲間3人で暇をみつけては相撲を取っていた。萱場資郎は体格のいい野生型の仲間（その一人は、後の民主党のホープ村松久義であった）とは違って、温室育ちのヤサ型であったようだ。しかし、いざ相撲となると、全くひとの意表をつくような技で奇襲戦法を取るのが得意であったという。

## 5. シュネーダー院長の説教「汝の敵を愛せ」に疑問、青年期の苦悩と決意

大正3（1914）年萱場資郎が中学2年のとき第1次世界大戦が勃発した。D．B．シュネーダー院長の説教は「汝の敵を愛せ」に象徴される「人道と人類の平和」が主題となっていた。しかし、青年萱場にとっては、キリスト教国にある人々が、競って殺戮を繰り返していることに、大きな矛盾を抱くようになった。「宗教や道徳は、戦争という現実に対して余りにも無力ではないか……、どうしたら世界平和は保たれるのか」そして「戦争に巻き込まれることなく、日本に平和をもたらすには、他国より侵略されない絶対的な力を保持すること以外に方法はない。そのためにも、優れた兵器を開発して、戦争を抑止することだ」と結論づけたのだった。

第2代東北学院長
D.B.シュネーダー

大正5（1916）年3月、東北学院中学部を卒業して間もなく、宮城県玉造郡川渡温泉に足を伸ばした。近くの山に登り、その山頂で自分の生き方を一つの詩に託した。

**地球載我　宇宙育我**
**一鞭先伏　羽奥山河**
**神州快傑　噓而在茲**
**呑天気迫　人知否哉**

《この地球や宇宙が私を誕生させ、成長させてくれた。私は先ず東北の山河の中で、ひたすら勉学に励み、実力を蓄えた。大日本の快男子がここにいるぞと、大声で叫びたい。その私が、全世界を圧倒する程の情熱や気迫を持っていることを、人々は知っているのだろうか》萱場資郎の青年期の思いは、日本を平和な国として維持し守るには、最強の兵器を保持する以外にないと考えるに至った。時すでに軍事国家の道を歩もうとしていた環境がそうさせたのか、萱場資郎の脳裏をかすめたものは、正に「新・海国兵談」の構想であった。林子平が「海国兵談」によって日本を守ろうとした時の国際環境と国際感覚に類似のものを見る思いがする。

仙台藩士・林子平肖像

## 6. 上京後、ひそかに兵器研究

東北学院中学部を卒業後、上京して明治大学、早稲田大学理工科に在籍した。しかし、「大学で教えるようなことは、本を見ればわかる。今日の学校は、融通のきかない過去の歴史をくどくど教えるだけで、その上に立って、それを統合し活用すべき精神を与えていない。自分は印刷的な教育によってスポイルされたくない。もって生れたままの精神をもって、自由な活動をしたい」という持論に燃え、学業の傍ら東大造兵科のノートを借り受け、兵器研究に没頭するようになった。

研究例として、電波で爆弾を誘導する方法や殺人光線などがある。なかでも新聞紙やボロ屑から毒ガスを作る経済的な方法を考案したが、誤って自作創造の毒ガスを吸引、健康を損ねてしまい、郷里仙台の病院に入院する羽目に陥った。1年後にやっと回復、退院を契機として早稲田大学を退学した。

## 7.「萱場発明研究所」を開設、後に「萱場製作所」を創業

兵器研究に対する情熱は益々高まり、大正8（1919）年11月、若干21才にして兵器産業の独自経営に乗り出し「萱場発明研究所」の看板を掲げた。当初の従

萱場発明研究所開設当時の萱場資郎
写真：KYB㈱提供

業員は約30名であった。

萱場発明研究所での兵器研究は日ごとに熱をおび、創意工夫のもと、実践向きに改良されていった。大正10年頃になると、「萱場資郎」の名は、兵器研究家として知られるところとなった。陸軍本部で3時間に及ぶ技術講演、海軍艦政本部で2時間の講演を行い、その技術の高さに、関係者一同舌を巻いたという。

大正12（1923）年9月、関東大震災に遭遇して萱場発明研究所が焼失、閉鎖に追い込まれた。これを機に、海軍艦政本部の専任嘱託となった。これは同郷の士、山梨勝之進海軍中将からの強い要請によるものであった。嘱託は大正10（1935）年8月から、昭和2（1927）年2月まで7年間勤める。

海軍大佐時代の山梨勝之進

【山梨勝之進は、仙台市中島丁（現仙台市青葉区八幡1丁目、宮城第一高校敷地）で生をうけ、後に海軍大将になった。また、現天皇の学習院在学時の院長でもあった。中島丁の邸宅跡は、人材教育に生かして欲しいと考え、宮城女子師範学校並びに付属小学校の校地に無償提供している。宮城第一高校敷地の一角に、その記念碑が立てられている。】

昭和2（1927）年1月、「萱場製作所」を東京市芝区に創業した。この時、前例のない海軍機密指定工場となるが、これは山梨勝之進の後押しによるものであった。従って、創業時には過大な大量の発注を受け、萱場製作所は順調な船出となった。山梨は同郷の萱場資郎を陰ながらサポートしていたのである。また、昭和9（1934）年には同社を訪問し、萱場資郎の発明的業績とその発展を心から喜んでいたという。「自分の目に狂いはなかった」と漏らしていたそうである。

萱場製作所の創業時の理念には、萱場自身が東北学院中学部時代に思い悩んだ「平和に対する正義感」が投影されている[3]。

「萱場製作所を作った本来の目的は、第2次世界大戦の勃発が歴史的必然性をもつものと信じていた。その戦争をやめさせるか、或いは万一起こっても、みじめな負け方はしたくないと思い、平和護持、祖国安泰のために、降魔の利剣を創製したかった。個人の栄誉や利益は毛頭考えていない」と所感を述べている。

## 8. 日本におけるジェット機研究の先駆け

昭和11（1936）年1月31日、陸軍参謀本部作戦課長石原莞爾大佐より、1つの用件が託された。これは前年の10月11日、萱場資郎が陸海軍航空本部長宛に出した「成層圏飛行機研究申請書」の件である。

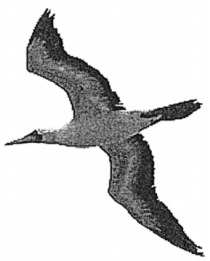
内容は「10年後の飛行機は、成層圏を高速で飛ぶジェット機時代になると信ずるので、陸海軍航空当局は全力をあげて研究実験にあたる必要がある」と述べたものである。石原莞爾大佐は当時、ジェットエンジンは世界中どこでも研究されていないことから、「ジェットエンジン推進による飛行機ができれば大変なことになる。他の民間でやれないから、萱場製作所でやってくれ」と要請したのだった。

以後、昭和16年までにＫＦ特別研究費（10数万円）を受けて、極秘裏に実験を重ねた。これは日本におけるジェット機研究の先駆けとなった。（ＫＦは、Kayaba Flightの略。）【日本大学の木村秀政教授は「萱場氏は“ロケット機は後方に熱いガスを噴出するので、無尾翼型式の方が適当である”と考えていた」と証言している。】

## 9. 独創的発想による夢の無尾翼ジェット機（ＫＦ）の開発

### (1) カツオ鳥とイカの生態からヒント

萱場資郎は幼少の頃より釣りが好きだった。萱場製作所を創業してからは毎週東京湾口に出かけ、鴨居から釣り糸を垂れていた。釣りを通して萱場は、驚くべき光景に出会う。それはカツオ鳥とイカの生態であった。


カツオ鳥

カツオ鳥は鰹（カツオ）に追われて逃げ惑う小魚群を、高所から急降下して捕捉する鳥である。カツオ鳥はほぼ完全な形での無尾翼で、長い胴や水平尾翼もなく、縦舵もない。頭をちょいと動かすだけで絶妙な操縦ができるし、空中停止もできる。海面近くに小魚群を見つけると、急転、三角翼となって急降下し、イワシ、アジなどをくわえて舞い上がる。この魚の下にカツオやイナダがいる。このカツオ鳥の生態をみて「これこそ最も効率のよい、大気圏内航空機の理想像」と思ったようである。

また、イカの生態にも関心を寄せた。イカは大魚に追いかけられて海面近くに逃げてくる。いよいよ敵が迫ると海水を噴射し、目にもとまらぬ速さで旋回し、後退する。万一敵に包囲されると、一瞬黒い煙幕の中に雲隠れする。

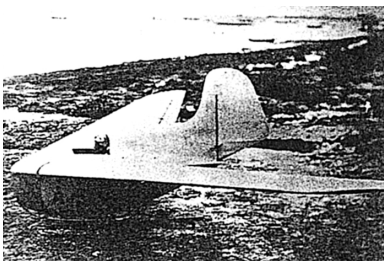
萱場資郎は、この2つの生き物の生態から、多くの

ヒントが与えられた。カツオ鳥の形状とイカのジェット推進装置を組み合わせ、無尾翼ジェット機（ＫＦ）を創るとした「成層圏飛行機研究申請書」を、陸海軍航空本部に提出した。丁度昭和10（1935）年の秋で、10年後の完成を目指した。この年の3月10日は、萱場製作所を㈱萱場製作所に改組した時でもある。

⑵ 木村秀政氏が機体設計指導

木村秀政日大教授

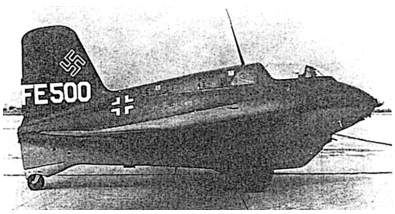
萱場資郎は無尾翼ジェット機（ＫＦ）を実現させるため、その原形設計に際し、関係者をしばしば釣りに案内している。これはカツオ鳥やイカの生態をよく知ってもらうためであった。案内した人には、日野熊蔵氏や木村秀政氏らも含まれていた。


萱場無尾翼グライダー（HK－1）

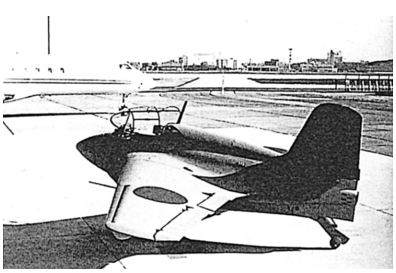
日野氏にはカツオ鳥を形どった無尾翼のペーパーモデルを作ってもらい、木村氏には一番よく飛んだペーパーモデルをもとに、機体設計、製造監督、飛行指導をお願いすることにした。

【日野熊蔵氏は明治43（1910）年12月19日、グラーデ単葉機で日本で二番目に１分20秒間初飛行した日本航空界草分けの一人である。木村秀政氏はＹＳ－11の設計で有名な、日本航空界の最高峰である。】

昭和19（1944）年4月7日、当初東大航空研究所で萱場製作所設計の図面を再検討し、試作は萱場製作所で行う予定であったが、ドイツから潜水艦で帰国した越野技術中佐が、秘密裏にドイツの最新ロケット戦闘機「メッサーシュミット」の図面を入手し、日本に持ち込んだ。これにより萱場式無尾翼ジェット機を取り止め、海軍はこの戦闘機に「秋水」と名づけて、海軍航空廠と三菱・中島両者で1千機を急速製造することになった。しかし、結果は燃料系の設計不良で墜落、実用されなかった。【木村秀政氏は「ドイツのメッサーシュミットは、我々が設計した萱場１型をまねたもの」と、後日述べている。】萱場資郎の「独創開発」への挑戦は、以上のことで挫折することなく、オートジャイロの生産に視点を移していった。



メッサーシュミット無尾翼戦闘機


海軍戦闘機「秋水」

## 10. 萱場製作所仙台製造所を創設、萱場式オートジャイロの生産拠点とす

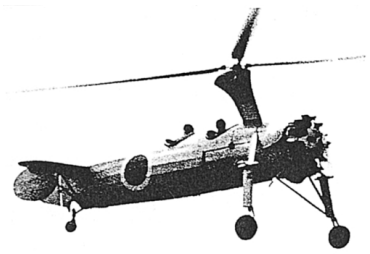
昭和8（1933）年頃、萱場資郎の叔父にあたる宮沢清作代議士と大石倫治代議士は、県議や市議を連れて、㈱萱場製作所本社を訪ね、仙台への工場誘致を請願している。この時、萱場資郎は「仙台は立地的に遠いし、機械工業の素地がない」と断わっている。確かに、この頃の宮城県の産業に対する貢献度は、3府43県中42位であった。

昭和14（1939）年2月7日、澁谷徳三郎仙台市長と菊田宮城県知事が㈱萱場製作所を訪ね宮城県工業化委員を引き受けてほしいと要請、辞令を交付している。萱場は青木常務を仙台に派遣し、下調べさせている。

昭和15（1940）年4月3日、仙台製造所技術員養成所を仙台市小田原清水沼（仙台市小田原長丁1）に開設。日本紙管会社の建物（260坪）と隣地（500坪）を買収した。同年9月、500坪の敷地に400坪の機械工場を建設、12月に完成した。機械50台の据え付けも完了し、翌年の昭和16年1月15日開所式を行い、いよいよ仙台工場での操業が開始された。大阪陸軍造兵廠の指導もあり、主としてセＨ70ミリ砲門、ＴＧ（戦車橋射出機）などの生産がスムーズに行われた。また、オートジャイロ（カ号観測機）の量産計画も進められていった。これには萱場資郎も並々ならぬ情熱を傾け「独創開発」に対する挑戦もピークを迎えつつあった。そんな折、東北興業（k.k.東北開発の前身）より、萱場製作所仙台工場の建設拡充支援の申し入れがあった。昭和15年8月8日のことである。萱場製作所と東北興業の折衝は、伊達興宗伯爵に依頼している。【伊達興宗伯爵は、山梨勝之進海軍大将の推薦により、昭和15年2月9日から㈱萱場製作所の名誉顧問になっている。】

昭和16（1941）年12月14日、萱場資郎が倉敷紡織本社を訪ね、同社仙台工場（仙台市長町八本松）の譲渡について申し入れをしている。その後の交渉は、伊達興宗顧問と大田黒重五郎専務が行っている。220万円で譲渡契約成立。（敷地3万坪、建物1万2千坪、小田原工場から八本松への移転費および新施設費100万円などを含む。）

昭和17（1942）年2月14日、仙台工場を拡張し、同



萱場式オートジャイロ（カ号2型）
写真：カヤバ工業㈱提供

年12月21日、長町工場への移転を完了している。仙台製造所では本格的に萱場式オートジャイロの生産が始まった。

昭和18（1943）年3月27日、萱場仙台製造所技術員養成所第1期生の卒業式が行われた。

東北学院航空工業専門学校生（霞の目飛行場で演習）

昭和19（1944）年8月1日、東北学院航空工業専門学校が誕生。萱場仙台製造所はその実習工場に供与された。昭和20（1945）年6月現在の仙台製造所従業員は、2363名。東北学院航空工専の動員学生は200名であった。

昭和20年8月15日、日本は無条件降伏し、ポツダム宣言を受託した。この時を境に㈱萱場製作所は民需用工業製品の製造に転換していった。

## 11. 戦後「日本の進むべき道」について提言

敗戦後の昭和22（1947）年5月20日、萱場資郎は「これからの日本、これからの技術」と題して種々提言を試みている[8]。

カヤバ工業㈱相模工場内に立つ
「萱場資郎之像」

世界観の項では「人類史は、原子力の時代に入った。これからの日本は、これからの技術を考えるにも、先ず原子力時代的人類観と世界観を哲学して、これを現実に引き戻して、近い将来のあるべき姿を策定せねばなるまいと思う。しかし、今まで世界にも日本にも、生きた哲学はなかった。特に日本の政治にも科学技術にも、哲学する観念なく、殆ど経験的事実を模倣するに止まっていた」とし、「世界の民族及び国々の将来の姿は、国力の最大の浪費者であった武力を早く放棄し、国際連合に国家防衛権を委任して国力の全部を、挙げてその国民の精神的、物質的、文化的内面充実に振り向けて、速やかにユートピアの実現に努めた方が、得策とも考えられる」と述べている。

次に日本観の項では「新日本を世界一流の住みよい国たらしむことである。うぬぼれかも知れないが、日本人は優秀な素質をもった民族であるし、世界の将来と、あるべき日本の姿を見透かした哲学ある強い政治意志と、科学合理性ある行政的努力があれば、二十年後の日本を、世界一流の社会生活国家たらしめることは可能である」と述べている。

以上のことを実現するには、「科学技術者の政治への参画が必要」と説いている。「ゆくゆくは科学技術党を結成し、閣僚の半分を科学技術者が占める科学技術内閣を作り、末端機構に至るまで、科学技術者によって代替をはかるべき」としている。最後に萱場資郎は「科学する国は栄え、科学しない国は滅ぶ」と結んでいる。

## 12. 萱場資郎の述懐[3]

昭和40年初頭、萱場製作所の歴史と独創開発の進展を振り返り、萱場自身次のように述べている。「企業は時代の環境や、社会思潮と経営者の趣味、性格、哲学に左右されることが多い。

晩年の萱場資郎
写真：カヤバ工業㈱提供

私は明治31（1898）年仙台市に生まれ、東北学院でクリスト教教育を受けた。第1次世界大戦時代であり、隣人愛と人道平和を説くクリスト教国が、有史以来の大戦を演じていた。私は国際暴力の前には、宗教も道徳も条約も、個人の意志も無力であり、弱点を暴露したときに襲われるものであることを教えられた。永い世界史もそれを示している。大戦がすむと国際連盟が生まれたが、不参加国も多く列強は虎視眈々、第2次世界大戦必死の世論がみなぎっていた。

私は生来、機械の考案が無性に好きであった。そこで将来この趣味をいかし、祖国の防衛に役立ち、その上、人類の義務たる世界平和に貢献する道はないものかと考えた。その挙句、逆説的に理想兵器の発明をめざして、兵器の研究工場を造ろうと決心し

た。今の核武装下の大戦抑止策と同じ考え方である。これは神の摂理であり、自分の生存の目的も意義も、そこに見出していた。昭和20年までの萱場製作所の歴史は、この異常哲学にひきづられて来たのである。

第2次世界大戦が終り、日本は長い間とりつかれていた戦争病から解放されて20年、世界は局地的な戦闘は時々あるにしても、大勢は戦いのない平和的な世界連邦の建設をめざして、苦しい歩みよりを続けつつある過程とも考えられよう。知性の向上によるものだろう。

人智は無限であり、欲望も無限である。あらゆるものに完全なものはない。しかし、常に完全を求めてやまない所に人類特有の進歩がある。回るこまは倒れず、流れる水はくさらない。経営のあらゆる面で反省と工夫改善するところに、企業の永続的発展があるように思えてならない」と結んでいる。

## 13. むすび

萱場資郎は昭和10（1935）年3月、㈱萱場製作所取締役社長に就任、以後、東京鉄機工業組合理事長、㈱大日本機械工業取締役社長、軍需省航空工業会降着装置部会理事長、内閣総合計画局参与（勅任官待遇）、浅野行政査察使主席随員、内閣技術院参与など、多くの役職を依頼され、着実にその責務を果たしてきた。

しかし、昭和49（1974）年5月12日、病を得て遂に帰らぬ人となった。正に巨星墜つで、各界より哀悼の辞が寄せられた。萱場工業㈱の社内報「けんゆう」の別冊として、故萱場相談役追悼号が組まれた。表題は「創業の祖・発明の父萱場資郎氏の功績を偲ぶ」。葬儀の様子や多くの人から寄せられた手記や談話が記されており、萱場自身の人柄が伝わってくる。「思いやりのある、やさしい人」の記載が随所に出てくる。

社葬は昭和49年5月28日、東京都港区青山葬儀所でしめやかに行われた。弔辞には木村秀政日本大学名誉教授や小田忠夫東北学院長・同窓会長などが名を連ねた。墓所は日蓮宗池上本門寺（東京都大田区）。墓石には萱場自身「星雲紋、または外三つ巴」と呼んだ社章が刻まれている。法名は「高徳院資生日栄居士」。享年76才。

以上、萱場資郎の人生航路を「独創開発」という視点でとらえてみたが、萱場自身生涯忘れなかったものは、宗教に対する関心とその実践であった。東北学院中学部でキリスト教に出会って以来、一時悩んで、神道にも関心をよせ、ひいては日蓮宗にも強く引かれていたことが分かる。「高山樗牛瞑想の松」の記念碑を建立したのも、これと無縁とは考えられない。高山樗牛は熱心な日蓮崇拝者であった。

しかしながら、萱場資郎は母校東北学院に対して、惜しみない献身ぶりを見せている。これはD．B．シュネーダー院長の薫陶が心に強く生きていたためである。かって、シュネーダー先生の墓前に大理石の花立てを献納する際に、同窓会のまとめ役として、その意見集約に力をかしている。東北学院で学んだ「汝の敵を愛せよ」という隣人愛は、とこしえに消え去ることがなかった。「萱場資郎は、東北学院を、ふるさと仙台を、そして日本国救済のために、技術者魂を貫き通して独創開発に挑んだ信念の人」と筆者はみている。

「萱場資郎之墓」
（東京都大田区、池上本門寺）

参考文献


⑴ 萱場家の歩んだ道、萱場寛一（第14代目）（1996.9）
⑵ 萱場四郎奮闘伝、日本教育資料刊行会、（1974.5）
⑶ 独創開発の歩み＝萱場資郎＝、カヤバ工業㈱、（1988.5）
⑷ 創業者萱場資郎「独創開発の歩み」、カヤバ技報（№10）、（1995.4）
⑸ 創業者萱場資郎、けんゆう（№547）創立七十周年記念特別号、カヤバ工業㈱、（2005.3）
⑹ 昭和の日本航空意外史、鈴木五郎、グリーンアロー出版社、（1993.8）
⑺ 日本初のロケット戦闘機「秋水」、松岡久光、三樹書房、（2004.3）
⑻ これからの日本　これからの技術、萱場資郎、萱場工業社史編纂資料（№837）、（1947.5）
⑼ 創業の祖・発明の父　萱場資郎氏の功績を偲ぶ、けんゆう〈萱友〉、萱場工業㈱、（1974.11）
⑽ 東北学院航空工業専門学校の誕生と萱場資郎、鶴本勝夫、東北学院資料室、（2007.12）



**鶴本 勝夫プロフィール**　TSURUMOTO, Katsuo

1942（昭和17）年、仙台市生まれ。
東北学院大学工学部機械工学科卒業（第1回生）。東北学院大学工学部助手、講師、助教授を経て現在、東北学院大学工学部機械知能工学科教授。専門は機械設計工学、磁気歯車工学。

# 資料室の一冊のアルバムが語る 創立80周年記念「マイフェアレディ」公演

東北学院大学名誉教授
吉川　清隆

東北学院資料室に保存されている、厳密に言えば38頁からなる一冊のパンフレット。分厚い白黒とカラーの一冊のアルバムと白黒のパネル写真は当時の東北学院大学の学生と学生部が造り上げた歴史的モニュメントについて多くを語っている。

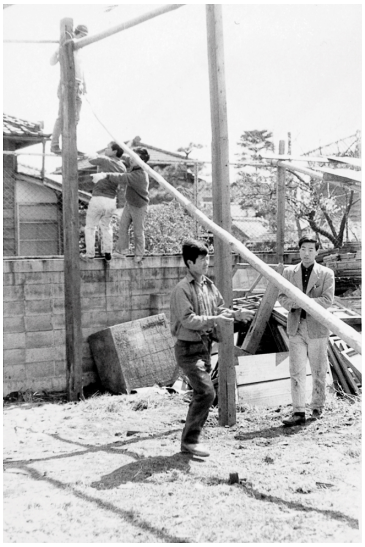
十数年前に設立された東北学院大学演劇部OB・OG会（現会長八巻和男）の主力メンバーの高橋文彦、本田十三男両氏の脳裏に今もなおはっきりと残っている学生時代の強烈な思い出がある。それは東北学院大学の80周年の記念行事の一大イベントとして東北学院大学文化団体連合会傘下のサークルが行ったマイフェアレディT.G.フェスティバルのことである。

「当時の学生部長星宮啓氏が、現在の換算では、400万円～500万とも思われる途方もない予算を制作に投じてくれた」とこの劇の企画を担当していた上記の高橋氏、同じく舞台監督の一人だった本田氏は興奮気味に語る。

ミュージカル全5幕もの。マイフェアレディT.G.フェスティバルは、昭和41年5月14日土曜日、午後1時と5時に宮城県民会館で公演された。　E.S.S.と演劇部が中心だったが、グリークラブ、民謡民族舞踊研究部、美術部、英語英文学研究部、広告研究部、シンフォニック・ウインド・アンサンブル、放送会、写真部が参加した。T.G.フェスティバルと名称になったのは、ブロードウェイでヒットしたミュージカルに拘わりなく、ジョージ・バーナード・ショーの原作『ピグマリオン』の思想を基礎とし、好き勝手に自由に話を展開しようと企画制作されたことに始まる。結局、学生は最初に提案された台本を蹴って、東京公演時の翻訳と舞台装置の図面を手に入れ、それらを基に前半英語、後半日本語の劇を仕上げることになった。

学生の若さと情熱を結集したこの企画には4つの意義がある。第１に大学の記念行事は学生と教職員が一体となって祝うこと。第２は、体育会は纏まりが良いが、文化団体連合会は必ずしも団結力がない。この機会にエネルギーを結集させたい希望があったこと。第３に演劇部は昭和22年の真船豊作「太陽の子」、有島武郎作「正餐」以来の伝統があり、蓄積した高度の技能と豊富な芝居経験を有するが、学内であまり熟知されていない。この機会に広く学内でこの伝統と技術を普及し、その他の部に伝承させてはどうか。第４にお山の大将われ独りを号する各部同士が創造力を競い合い、切磋琢磨し、成長し、もっと広い世界で羽ばたいてはどうか。例えば、E.S.S.には創設当時より本学の音声学の教授で、日本中にその名を馳せた、ロバート・ゲルハード氏の直接指導によるシェイクスピア劇の公演を手がけてきた伝統があった。しかし本来の芝居に期待される大道具、小道具、音響効果、照明、衣装等はいま一つの努力が求められていた。グリークラブの歴史は古い。明治35年、現在の宮城学院女子大学との混声に活動の

創立80周年記念合同公演パンフレット


作業場造りから始まった大道具担当

第一歩を発し、昭和10年、グリークラブと称するようになり、青山学院大学との交歓演奏会、東北・北海道演奏旅行を持ち、全国大会で上位入賞するまでになった。しかし、日本各地から数多くお呼びのかかるグリークラブは、単独の演奏会があるにしても大きな企画の一部として登場する事はなかった。

各部は今回の企画の呼びかけに微妙な反応を示した。E.S.S.は単独公演を主張し、演劇部も同様の希望であった。グリークラブは主役でない役割に不満であり、気乗りがしなかった。

しかし、アルバムの中の写真の一つ一つが一切を物語るように、企画の発会式、役割分担の確定、公演の日時の決定、6ヶ月の練習予定表の発表など制作の大きな歯車が回転するに従って、各部のエゴは、教員、職員、学生間の猜疑心、妬み、虚栄心と共に知らず知らずの間に、この全学を挙げての公演に向かっての静かなうねりの中に消えた。

全国の大学に先駆けて本学で実施した新入学生の為のオリエンテーション・プログラムの生みの親であり、未来の大学のあり方を明確に捕らえ、学生を信じ、学生に絶えず温かい眼差しと励ましを送り、学生と共に歩んでこられた、当時の学生部長、星宮啓氏（現大学長星宮望氏の父君）、最初は半信半疑であったが、次第に学生の課外活動に理解を示した、文化団体連合会長、文学部長の小林淳男氏、演劇部の先輩で、この仙台の土地での演劇活動を支援し，マイフェアレディの演技指導と踊りの振り付けを快く担当してくれた鈴木克子氏、皆故人であるが、アルバムに垣間見る隠れた主役であった。

大学としても、この様な巨額の投資と冒険は、建学以来、初めての試みであったろう。しかし、この壮大な試みを通じての、学生部長の絶えざる学内への啓蒙と説得と市民への呼びかけは、やがて仙台の各キャンパスにも荒れ狂う学生運動の嵐に対する予防と対策を暗にほのめかしていたかのようにも読み取れる。

校内では建端（たっぱ）の高い県民会館のステージのセット作りに適当な場所がないことを知った大道具方は、早速、廃材を仕入れ、作業場兼物置を造る作業から着手した。校庭の北西の隅に槌音の快音がまず最初に響いた。

経験と伝統を自負し、己だけが演劇人と思い込んでいた当時の演劇部の部員たちは、すべてを無にし、ひたすらに技能と精神を彼らから必死に学ぼうと付きまとうE.S.S.の一人一人の熱心さに、迷惑い、驚き、そしてその迫力に圧倒された。スナップはその様子を如実に捉えている。

通常の芝居の製作過程では、音響効果、衣装、照明係りは、ゆっくり腰を上げるのが常だが、今回は違っていた。音響効果班は教会の鐘の音を求めて、深夜の町を彷徨することで行動を開始した。今と比べて交通量の少ない深夜だが、完全に雑音が遮断されていた訳ではない。幾夜も録音を試みたが、満足な教会の鐘の音はついに得られなかった。しかし、一途な彼らの努力に報いる閃きが生まれた。最終的に公演当日使用した結婚式の教会の鐘の音は、マイフェアレディの本邦初演の台本を翻訳し、我々の公演の来賓として招いた某大学教授をして驚愕させた。黒澤明流のど根性よろしく、若者の感性と休みない追求の努力の賜物は、録音テープの再生速度の操作

イライザ役の秋葉澄子

という手段に出た。2分の1の遅速度での再生が功を奏した。

一時が万事。苦労は翻訳、脚色、制作、表と裏、英語の部にも日本語の部にも伴った。6ヶ月の準備期間は短くもあり、長く苦しい時でもあった。学生の中には、初恋も恋人との決別も、親の離婚や別離を経験した者もいた。このような苦痛の時を経て、前半英語、後半日本語の大作はついに完成した。

当時東北で最も大きい収容人数を誇る宮城県民会館に満員の観客を入れ、5月14日１時定刻にまず昼の部の幕が、シンフォニック・ウィンド・アンサンブルの奏でる前奏と共に上がった。

第一幕が始まった（故辻本一政氏の演出）。1912年、ロンドン。ある雨の降る夜のこと、雨宿りをしている人々の間に1人の薄汚い花売り娘イライザが現れる。丁度そこに居合わせた音声学者のヒギンズ博士は「何てひどい訛りだ。俺なら、この娘を6ヶ月で、素晴らしい貴婦人にして見せる」と呟いた。

第二幕はヒギンズ教授の家をイライザが訪れ英語の教えを請う場面である。イライザの父、ドゥリトルはこれ幸いと金をせびる。

第三幕は6ヵ月後の夏の夕べ。華やかに開かれたガーデン・パーティ。イライザのお披露目の日。彼女がヒギンズやピカリング大佐の心配をよそに美しいワルツのメロディに合わせて颯爽と登場する場面。

第四幕、第五幕は演劇部による、日本語のプレゼンテーション（門木悦志氏の演出）。一人の花売り娘を社交界のトップレディに仕立てたヒギンズとピカリング大佐は満足して帰宅する。そこに浮かない顔でイライザが登場する。第五幕ではヒギンズの母のもとにイライザが来て悩みを打ち明ける。そこにヒギンズが現れるが二人は口論になってしまう。

二時間余の公演は無事終了した。鳴り止まない拍手をよそに、役者、裏方の面々は夜の公演の準備を始めた。

そして、夜の部の幕が上がった。昼の部に自信をつけた表方、裏方の繰り広げるドラマは学生演劇の域を越えていた。舞台はプロの東京公演に遜色のない堂々とした代物だった。効果音も、照明も、合唱、ピアノ、バイオリン、オーケストラも超一流、学生たちの魂のほとばしる舞台が果てしなく繰り広げられた。

やがて、すべてが終わった。緞帳が下りる。役者も道具方も舞台の上で泣いた。完成の喜びには涙が最もふさわしい。抱き合った。一升瓶の冷酒が振舞われた。茶碗酒である。大道具方の一人がセットの柱によじ登り、長い梁を木槌で叩き落した。この一本の梁のためにどんなに苦労してきたことか。それを云いたかったのか。

日の出会館の5階で行われた反省会と祝賀会を最後に、マイフェアレディに参集した若者たちは消え、キャンパスは平常の静けさに戻った。

そしてマイフェアレディT.G.フェスティバル制作によって育てられた若き生命の一部は卒業を迎え、やがて全国に散った。銀行に、新聞社に、百貨店に、

演劇部による日本語のプレゼンテーション

製薬会社に、家業に、公務員に、教師に、そしてその他の企業に。

鈴木克子氏と一緒に振付を担当した宮城学院女子大学の梶賀千鶴子氏はこの公演を無事終えて心に誓ったものがあった。梶賀氏は宮城学院の記念行事を学生の手でやりたいと決意した。そして、彼女はその誓いを見事100周年の時に実行したのである。しかも、幼稚園児から大学生までの参加を得た見事な試みだった。

あれから42年の時が流れた、あの血気盛んだった輩は功なし名を遂げて無事定年を迎えたであろう。彼らの胸中と脳裏に残るものは、しかしながら、まさしくアルバムとパンフレットの隅々に隠された思い出と感動ではないだろうか。

卒業生各位もこのアルバムとパンフレットを手にとって、御自身をそこに登場する人物達と二重写しにして、東北学院で過ごした良き日々の追憶に浸って欲しい。

**吉川 清隆プロフィール　YOSHIKAWA, Kiyotaka**

1931（昭和6）年生まれ。
東北学院大学卒業。
東北学院大学助手、講師、助教授、教授。
平成11年定年退職後も平成16年まで嘱託。
平成17年名誉教授。

# 鈴木義男に関する新資料

東北学院大学経済学部教授
仁昌寺　正一

東北学院創立120周年記念事業の一環として行われた『大正デモクラシーと東北学院――杉山元治郎と鈴木義男――』（図録、2006年10月）の刊行から、早や2年余が経過した。この間、引き続き行われた調査で発見された資料や、杉山と鈴木の親族をはじめとする関係者から新たに寄せられた資料が、かなりの数に達した。ここでは、それらの中から、鈴木に関する資料の一部を紹介することにする。これらは、筆者がこの図録の改訂の際には必ず追加・挿入したいと考えたものである。なお、以下の本文では、人物の敬称は省略した。

## 1. 東北学院の学生時代の写真

＜教師を囲んで＞　鈴木義久氏提供
後列左端が鈴木義男、前列中央が出村悌三郎

鈴木義男は、1907（明治40）年4月から1912（明治45）年3月までの5年間、年齢でいえば13歳から18歳まで東北学院普通科に在籍した。この写真は、同校の高学年時、友人らとともに教師であった出村悌三郎（後の第4代東北学院院長）を囲んで撮影されたものである。鈴木義男の若き日の様子がわかる貴重な写真といえる。

## 2. 姉・愛子の結婚時の写真

鈴木義男は、鈴木義一・イエがもうけた10人の子どもの中の6番目の子どもで、三男であった。しかし、12歳年上の長男・寛治が日露戦争（1904～05年）で死亡し、5歳上の次男・道が1歳で死亡したため、物心ついたときには鈴木家の跡取りのような立場にいた。

＜姉・愛子の結婚＞　今井雄志氏提供
左側から、義杖（五男）、道乃（四女）、愛子（三女）、森兵吾（愛子の結婚相手）、義一、義男（三男）、義臣（四男）、義邦（六男）

この写真は、1913（大正2）年9月、鈴木義男が第二高等学校（旧制二高）の2年生時のもので、義男の三つ年上の姉・愛子の結婚時に、福島県白河町（現・白河市）田町にある自宅前で撮影されたものである。ちなみに、この時、母・イエはすでに亡くなり、10歳年上の長女・ユウは山川家に嫁いでいた。写真の中の向かって左から3番目が愛子、その右隣が結婚相手の森兵吾（後の九州帝国大学教授）である。なお、愛子はこのとき22歳であったが、1924（大正13）年、病気のために33歳で亡くなっている。原田恭助著『森兵吾博士記念録』（1954〔昭和29〕年刊行、東北学院大学中央図書館に鈴木義男文庫として所蔵）に収録されている森兵吾の日記には、妻の愛子に関する記述がいくつかみられる。

## 3. 東京帝国大学の学生時代の写真

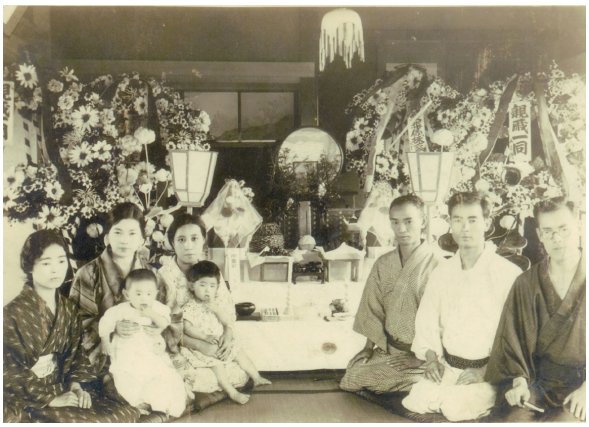
鈴木義男は、1915（大正4）年9月、東京帝国大学法科大学法律学科に入学した。そして1919（大正8）年7月までの4年間、同校に在籍した。

次ページの写真は、鈴木義男の東京帝国大学の学生時代の姿を写した数少ないものである。友人であった新明正道（後の東北帝国大学教授）が、「私の手許にある写真帖には、大正八年秋京大で開催された緑会弁論部主催の東大京大合同弁論会の写真があり、これには東大側代表弁士として出場した門田武雄君と私の顔がうつっているが、その前列の椅子には鈴木君がすわっている。当時鈴木君は弁論部委員

＜東京帝国大学の学生時代＞　東北社会学研究会『新明社会学とその周辺』（1985年8月）所収
　前列左から4人目が吉野作造、その右が鈴木義男、右端が赤松克麿、後列中央が新明正道

をやっていた」（鈴木義男伝記刊行委員会編『鈴木義男』、1964年12月、63ページ）としているものではないかと考えられる。また、新明によれば、当時、鈴木は吉野作造の「高弟」（同上）であったという。この写真でも両者が隣り合って座っていることから、そのことがうかがえよう。

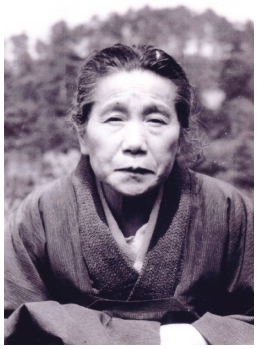
## 4. 妻・常盤（ときわ）の兄弟たちとの写真



＜妻・常盤とその兄弟夫婦とともに＞　小林芙美子氏提供
　向かって右側男性3人のうち、手前から鈴木義男、鉄本総吾（常盤の弟）、鉄本悟一（常盤の兄）。向かって左側のうち、手前から鈴木常盤（鈴木義男の妻）、鉄本多賀子（鉄本総吾の妻）とその子供、鉄本りき（鉄本悟一の妻）とその子供

この写真は、鉄本家の葬儀の際に撮影されたもののようである。この写真には、妻・常盤の若い時の姿が写っていること、また常盤の兄の悟一（鉄本家の長男）とその家族、及び総吾（同次男）とその家族が写っているということでも珍しいものである。常盤は義男の2歳年上（したがって「姉さん女房」）、悟一は義男の4、5歳年上、総吾は義男の2歳年下であった。ちなみに、総吾は、宮城県立第一中学校に通っていた当時、東北学院普通科で働きつつ学んでいた義男に対して大きな尊敬の念を抱いており（前記『鈴木義男』、227−228ページ）、それゆえ後に「東大法学部時代に、私の義兄になった。姉と結婚したのだ。全くよい人材を義兄にすることが出来て、一方ならず誇りを感じたものであった」（同、229ページ）と回顧している。なお、総吾によれば、その後の鈴木の波乱万丈の人生において、「鉄本一家一族の心からの好意と、強力なバックは、又実に大きかった」（同、232ページ）という。

## 5. 姉・ユウと山川家の人々の写真



＜①山川ユウ＞
山川和夫氏提供

＜②山川淳一郎（ユウの夫）＞
山川和夫氏提供

＜③山川家の人々＞　山川和夫氏提供
　前列中央がユウ、その右隣が長男・淳義（芸名園松）、右端が淳義の妻・光子、ユウの左隣が長女・美智子

①の写真は鈴木義男の姉のユウである。ユウは鈴木義一・イエ夫妻の長女として1884（明治17）年に生まれ、三男・義男のちょうど10歳上であった。1907（明治40）年に23歳で山川淳一郎（牧師、②の写真）と結婚した。③の写真は山川家の人々である。前列中央がユウで、その向かって左が琴の演奏家・作曲家としても有名な長男の淳義（芸名・園松）、その左が淳義の妻・光子、ユウの左が長女の美智子である。④の写真は造船技術者であった次男の信雄である。

鈴木義男の家族と山川家の人々は、鈴木が東北帝国大学教授を辞任し東京で弁護士を開業した1930（昭和5）年頃から、とくに親密な付き合いが始まったようである。当時、東京盲学校に入学し寮に入っていた長男の淳義は、「その当時私は日曜

＜④次男・山川信雄＞
山川和夫氏提供

毎に叔父の家に行く事が何よりの楽しみでした。……叔母は私の食事について何時も何かと心遣いをして私の好物をご馳走して下さいましたので、それが嬉しく日曜日が待遠しい位でした。」（前記『鈴木義男』、239ページ）と後に回顧している。また次男の信雄も、「叔父の家に出入りして中学、高校、大学を経て社会に出て今日に至る迄叔父から非常に大きな恩恵を与えられ、思い出というと先ず感謝の心である。私は本当に良い有難い叔父を持って仕合せであったと思う。」（同、248―249ページ）と語っている。

## 6. 海外留学からの帰国時の写真

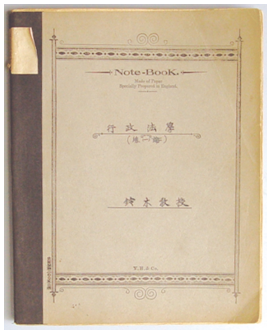
＜天洋丸のデッキで＞　小林芙美子氏提供
妻・常盤、次女・ゆり子、義男、長女・絢子

＜天洋丸のデッキで＞　小林芙美子氏提供
中央が常盤、その前がゆり子、その右隣が絢子、その後ろが義男

鈴木義男は、1921（大正10）年7月から1924（大正13）年3月にかけて、ドイツ、イギリス、フランスに留学している。

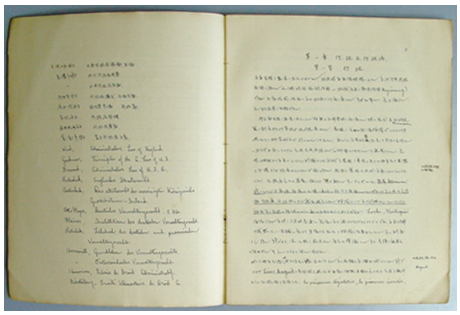
この2枚の写真は、鈴木がこの留学から帰国した1924年3月3日、横浜港において、乗船してきた天洋丸の甲板上で撮影されたものである。鈴木の帰国の日については、前記『鈴木義男』の中で、鉄本総吾が「三月まだ寒風の頃米国から天洋丸（なかなか立派な客船）で横浜に帰朝された。賑やかな出迎え甲板で写真撮影、絢子ちゃんと百合子ちゃんが両方から義兄の腕をつかんで離れなかった」（231ページ）と記述しているものの、これまでは帰国したのが3月の何日かまでは分からなかった。しかし、この2枚の写真の裏に「三月三日」と記入されているため、帰国日を特定できたのである。ちなみに、鈴木は同年3月28日付けで、東北帝国大学法文学部教授の辞令を交付されている（前記『鈴木義男』、450ページ）。

## 7. 木下彰による鈴木義男教授の受講ノート




＜『行政法学（総（一）論）』の表紙＞
東北大学史料館所蔵

『行政法学（総（一）論）　鈴木教授』、『行政学総論（二）　鈴木教授』は、東北大学史料館の「木下彰文書」に収められている「受講ノート」である。「鈴木教授」というのは、いうまでもなく鈴木義男のことであり、故・木下彰（元東北大学教授）が東北帝国大学法文学部の学生時代に鈴木の講義を受講した際に作成したものである。東北大学史料館のご厚意により、これらのノートを複写させていただき、判読作業に取りかかったところである。いずれ、この作業が完了すれば、当時の鈴木義男の行政法学の講義内容をより明確にしうるであろう。



＜書き出し部分＞

## 8. 中学生になった娘たちとの写真

この写真は、鈴木義男の次女・新井ゆり子によれば、長女の絢子と自分が中学生の頃に撮影されたものではないかという。『大正デモクラシーと東北学院――杉山元治郎と鈴木義男――』の199ページには、絢子が小学校6年生、ゆり子が小学校4年生のときの写真が掲載されているが、それから2、3年後の2人の成長した姿がわかる貴重なものである。

＜中学生になった娘たち＞　小林芙美子氏提供
左から常盤、ゆり子、絢子、義男

## 9. 東北学院理事長時代の写真

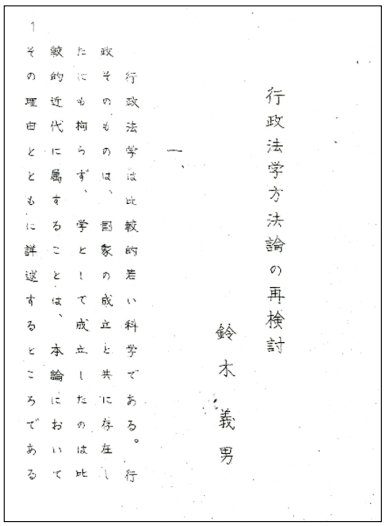
＜①東北学院理事会のメンバー＞　東北学院保存資料
前列中央が鈴木義男、向かって右端が杉山元治郎、左端が小田忠夫

＜②ミス・ゲルハートの来日＞
東北学院保存資料
前列中央がミス・ゲルハート、
後列中央が鈴木義男

この2枚の写真は、いずれも鈴木の東北学院理事長時代に撮影されたものである。改めていうまでもなく、鈴木義男は、1947（昭和22）年7月から長逝までの1963（昭和38）年8月までの約16年間、第6代理事長の要職にあった。①の写真は、正確な時期は特定できないが、理事会のメンバーが一堂に会したときのもので、超多忙であった鈴木義男と杉山元治郎が一緒に写っている貴重な1枚である。下の写真は、ミス・メアリ・ゲルハートが来日したときに撮影されたものである。彼女は、東北学院の英語教育担当の宣教師であったポール・ゲルハートの妹であり、1905（明治38）年に来日して以来、兄とともに東北学院の英語教育にあたっていたが、太平洋戦争勃発の直前の1941（昭和16）年4月にアメリカへの帰国を余儀なくされたのであった。この間、独身を守りつつ、英語教育に専念していたこともあって、“ミス・ゲル”という愛称で呼ばれていたという（『東北学院百年史』学校法人東北学院、1989年5月）。戦後、教え子たちの懇請により、その彼女の来日が1961（昭和36）年4月に実現したのであった。むろん、鈴木にとっても、かつて東北学院普通科に在籍していた時代の恩師であっただけに、ひときわ感慨深かったのではないだろうか。

## 10. 鈴木義男の博士学位論文

＜①自宅で執筆中の鈴木義男＞　小林芙美子氏提供



行政法学方法論の再検討

一、

鈴木義男

行政法学は比較的若い科学である。行政そのものは、国家の成立と共に存在し、たにも拘らず、学として成立したのは比較的近代に属することは、本論においてその理由とともに詳述するところである

＜②博士学位論文の書き出し部分＞（複写）
同志社大学図書館所蔵

①の写真は、東京都世田谷区北沢の自宅で執筆中の鈴木の姿を写したものである。②の写真は、鈴木義男が同志社大学に提出した博士学位論文――『行政法学方法論の再検討』――の書き出しの部分である。この論文は、十数万字にも及ぶ膨大なもので、末尾には「一九五二、五、三〇脱稿」（1952〔昭和27〕年5月30日脱稿）と書いてある。この二つの写真をあえて並べてみたのは、恐らく、国会議員、弁護士、大学教授など広範な仕事を行っているなかでわずかな時間をみつけては、このような姿で研究に取り組んでいたのではないかと考えたからである。

前記『鈴木義男』の巻末に添付されている「年譜」よれば、鈴木がこの論文を提出したのは1952年7月であり、1954（昭和29）年1月23日に「法学博士」の学位を授与されたことになっている。このとき60歳になっていた鈴木が、超多忙の中、このような難関に挑んだ理由について、相馬勝夫（後の専修大学学長）は、「先生（鈴木義男）は青年を愛し、特に学生を愛された。先生が博士号を取られた有力な動機の一つは、学生と若い教員たちを鼓舞されるためであった」（前記『鈴木義男』、77ページ）と語っている。ちなみに、鈴木は、学位を授与されたとき、専修大学の学長を務めていた。

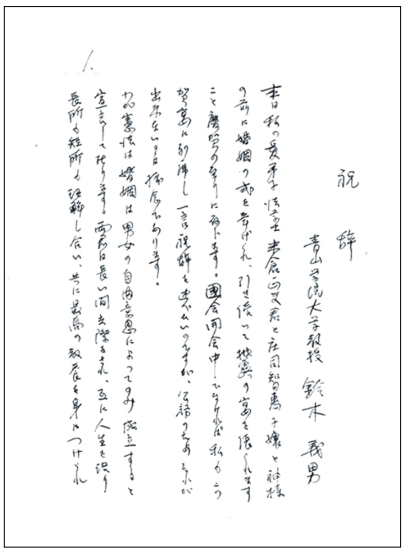
その後、鈴木はこの論文を1954年5月発行の『専修大学論集』第6号に投稿している。参考までであるが、その内容について、蠟山政道は「大陸法系、英米法系並びにその両者の影響の下にある日本行政法の将来について、それぞれの国における歴史的発展に従ってその方法論の特徴を比較研究したもので、わが国の行政法学界に類い稀れな労作と言えるであろう」（前記『鈴木義男』、182ページ）と評している。

このこととも関連することであるが、近年、鈴木の行政法学の再評価の動きが出てきている。例えば、『法学教室』（有斐閣）2008年2月号において、園部逸夫（元最高裁判所判事）は次のように語っている。長くなるが、法学者がみた評価という点で極めて重要だと思われるので、引用しておきたい。

> **東北大学の教授をしていた鈴木義男という人がいます。この人は戦争中の軍事教育、軍事教育というと、配属将校が行う軍事教育だと思うのですが、これに反対したために東北大学を追われて、弁護士になるのです。それまでに行政法について、随分きちんとした体系書も書いておられ、また『公法学の諸問題』2巻では、「行政法学方法論の変遷」というドイツの行政法学の方法論について、相当厚い論文を書いておられます。これは正鵠を射た論文で、結局理論と実際というのは永久にその結合点を見出すことができないとはっきり述べています。要するに抽象的な規範を具体的な規範に変えていくことは、行政なり司法なりの役割ですが、具体的にどのように変えたか、あるいは変えているかということがはっきり認識されないと、理論との結合は非常に難しくなってきます。教科書や理論のほうは、全くそういうものと関係なしに突きつめれば創造法というものを裁判官に代わって示すとか、国家機関に代わって自ら法創造をするというのが基本的な学者の役割ということになりかねない。そうは言っても、これは極めて哲学的、理論的な議論になるわけで、その辺を無理に分けようとすると、行政法の総論というのは行政法学の論理主義というか、あるいは合理主義が出てくるわけです。各論は個別法的なもので、個別法になってくると、法律中心になってきますから。しかし、これがあまり法令中心で書かれたものは、結局行政官僚のための執務提要というか手引というか、そういうことになってしまいます。したがって、あまり細かく法律を分けて、それを全部解説していくというよりは、同じ各論でももう少し総合的な方法でやるべきではないかと、鈴木さんは言っています。そこのところは非常に難しい問題で、現代の行政法学にとって鈴木さんの比較研究というか、行政法学の方法論に対する研究は、かなり意味があるとは思います。この人はそれで辞めてしまい、弁護士になって、戦後代議士になって、社会党から出て法務大臣までなっています。ですから、まさに学者と実務の両方の頂点に行ってしまうのです。（61―62ページ）**

鈴木に対する尊敬の念を抱きつつその足跡を追いかけている筆者としては、このような評価と出会うことは何よりもうれしいことである。

## 11. 愛弟子の結婚への祝辞


祝辞
青山学院大学教授 鈴木義男

＜祝辞（最初の部分）＞　米倉正夫氏提供

これは、鈴木義男が、青山学院大学教授時代の「教え子」である米倉正夫の結婚に贈った「祝辞」である。米倉は、青山学院大学法学部の行政法ゼミに所属し、鈴木の指導を直接受けた文字通りの愛弟子であった。卒業後は、出身地の北海道の高校教員となっていた。この「祝辞」については、前記『鈴木義男』において、「昨年、結婚の折にもわざわざ御祝辞を書いて下され、夫婦の進むべき道をさとしてくださいました。一片の電文ではありませんでした。あの丸の内の事務所で、例のお机に向って文句を口誦さまれながらお書きになったのだろうと想像いたし、皆様の前で第一番に読ませていただきました。」（95ページ）と書いておられるが、今回、40年間大切に保存していたこの「祝辞」をあえて拝見させてくださったのである。以下では、米倉の承諾を得て、筆者がパソコンで打ち直したものを掲載しておくことにする（原文は縦書きであるが、本誌の規定にしたがって横書きにした）。

### 祝　　辞

**青山学院大学教授**
**鈴木　義男**

**本日私の愛弟子法学士米倉正夫君と庄司智恵子嬢と神様の前に婚姻の式を挙げられ、引き続いて披露の宴を張られますこと慶賀の至りに存じます。国会開会中でなければ私もこの賀宴に列席し一言祝辞を述べたいのですが、公務のためそれが出来ないのは残念であります。**

**わが憲法は婚姻は男女の自由意志によってのみ成立すると宣言して居ります。両君は長い間交際をされ、互に人生を語り長所も短所も理解し合い、共に最高の教養を身につけられ、ここに信仰と信頼と尊敬とをもって婚姻生活に入られたのでありまして、これ以上立派な模範的結婚はないと信じます。どうか末**

**長く艱難を克服しつつ和楽の家庭を営まれますように祈る次第です。**
**和楽の家庭はどうすれば出来るか。長い家庭生活の勝利者、銀婚金婚の賀筵をはった先輩にききますと、人の共同生活はいつも安穏なものではなく、時に風波もあり、感情の対立も無きにしもあらずであるが、大切なことは常に相手の立場に自分を置き、何が不満のもとであるかを反省することにあるようであります。自分はよくて相手が悪いと信ずるときに争が起るのであって、どちらかが退いて自分が悪いのだ、自分が至らないのだと自覚するならば忽ち争点は解消されて了うものであります。両君が危機に際会したならばどうか常にこの事を思い出して下さい。**
**孔子は凡ての人倫は端を夫婦に発すと申しました。一対の男女が仲よく暮して行く、これ程簡単に見えることはないのですが、やって見ると仲々そう簡単なものではないのであります。絶えざる思いやりが必要であり、謙譲や尊敬や忍耐やあらゆる美徳が存在することが必要なのであります。さればこそよき家庭を営むことに成功する男女は、やがてよき隣人となり、よい町よい村、よい国を作るのでありまして、治国平天下に通ずるということを仰せられたのであります。よい教育者、よい社会事業家たることを期して待つべきであって、両君の家庭生活の成功は天下国家につながることを記憶され度いのであります。**
**どうか両君は今日を出発の日として、波らんの多い人生の航路を互にいたわり合い慰め合い、無事に彼岸に到達されますよう祈って已みません。**
**一言寸楮に托して御祝いの言葉といたします。**

この祝辞の一文には、愛弟子の幸せを心から祝福しようとする鈴木の姿勢が滲み出ている。これ以上の「解説」はあえてすべきではないように思われる。

## 12. 聯芳寺（れんぽうじ）での葬儀

＜聯芳寺での鈴木義男の葬儀＞　山川和夫氏提供
鈴木義男の遺族

鈴木義男は、1963（昭和38）年8月25日、永遠の眠りについた。鈴木の葬儀は、8月31日に青山学院大学で民主社会党葬として行われ、続いて9月10日に鈴木家代々の先祖が葬られている聯芳寺で行われた。そして9月14日には、鈴木の母校であり、第6代理事長を務めていた東北学院で追悼式が行われた。

この写真は、これらのうち、聯芳寺で行われた葬儀の写真である。『大正デモクラシーと東北学院――杉山元治郎と鈴木義男――』の作成時には入手できなかった大変貴重な資料である。

## おわりに

最後に、近況として、芳賀清明（友愛労働歴史資料館客員研究員）の尽力によって判明した二つのこと報告しておきたい。一つは、鈴木義男が、東京帝国大学助手時代の1921（大正10）年の3月から7月まで、鈴木文治率いる友愛会の東京連合会が開設した「東京労働講習所」で講師を務めていたことである。『労働』という雑誌の同年8月号には、「鈴木講師は欧州留学の為め七月二十三日出帆の予定なりと」（69ページ）と書かれており、文部省在外研究員として留学する直前まで同団体の講師を務めていたことがわかる。もう一つは、鈴木義男が、1960（昭和35）年1月に結成された民主社会党の前進に奮闘していたことである。当時の『旬刊・社会新聞』（『後に民社新聞』と改名）には鈴木に関する記事が頻繁に出てくるが、それらの記事によって、その様子をリアルにみてとることができる。

なお、これら以外にも、鈴木義男に関する資料がたくさん寄せられている。紙数の制約上紹介できなかったそれらの資料については、また別な機会に紹介したいと思う。

＜謝辞＞
本稿への鈴木義男に関する資料の掲載をご快諾いただきました新井ゆり子様、鈴木義久様、小林芙美子様、今井雄志様、山川和夫様、米倉正夫様、東北社会学研究会、東北大学史料館、同志社大学図書館に深く感謝致します。

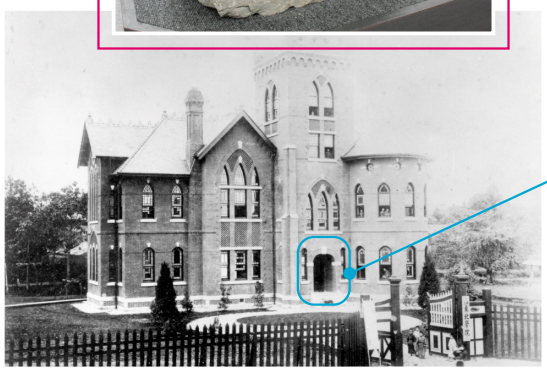
**仁昌寺 正一プロフィール**　NISHOJI, Shoichi

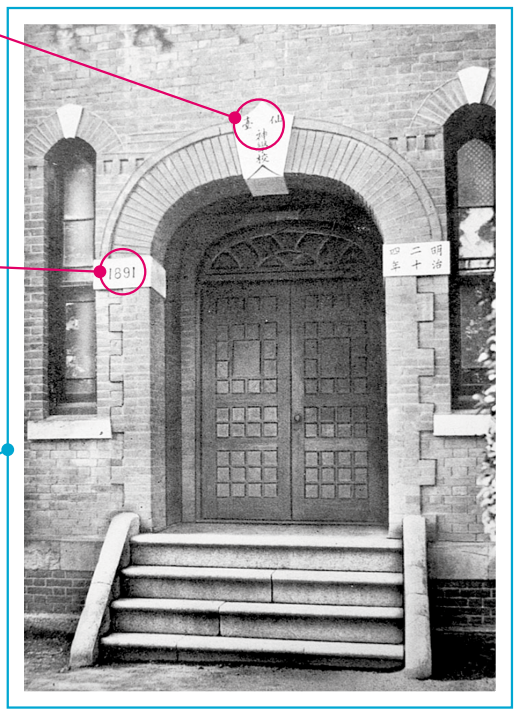
1950（昭和25）年生まれ。
東北学院大学大学院経済学研究科博士後期課程満期退学。
東北学院大学経済学部助手、講師、助教授を経て現職。
『大正デモクラシーと東北学院―杉山元治郎と鈴木義男―』（学校法人東北学院、2006年10月）において、鈴木義男を担当、執筆。

# 仙台神学校の礎石

仙台神学校正面玄関のストーン。昭和20（1945）年7月10日の仙台大空襲後、焼け跡から発掘されたものです。「仙臺神學校」の「臺」と「神學」、それに「1891」という文字を読み取ることができます。校舎玄関入口のキー・ストーン（楔石）に「仙臺神學校」、左右の石に「明治二十四年」「1891」と刻まれていました。

仙台神学校は、明治24（1891）年、現在の東二番丁と南町通りの北西角付近に完成しました。赤煉瓦造り、方形五層の塔を持つ、当時日本でも非常にめずらしい本格的欧風様式を取り入れており、その美しさは市民の賞賛の的であったということです。

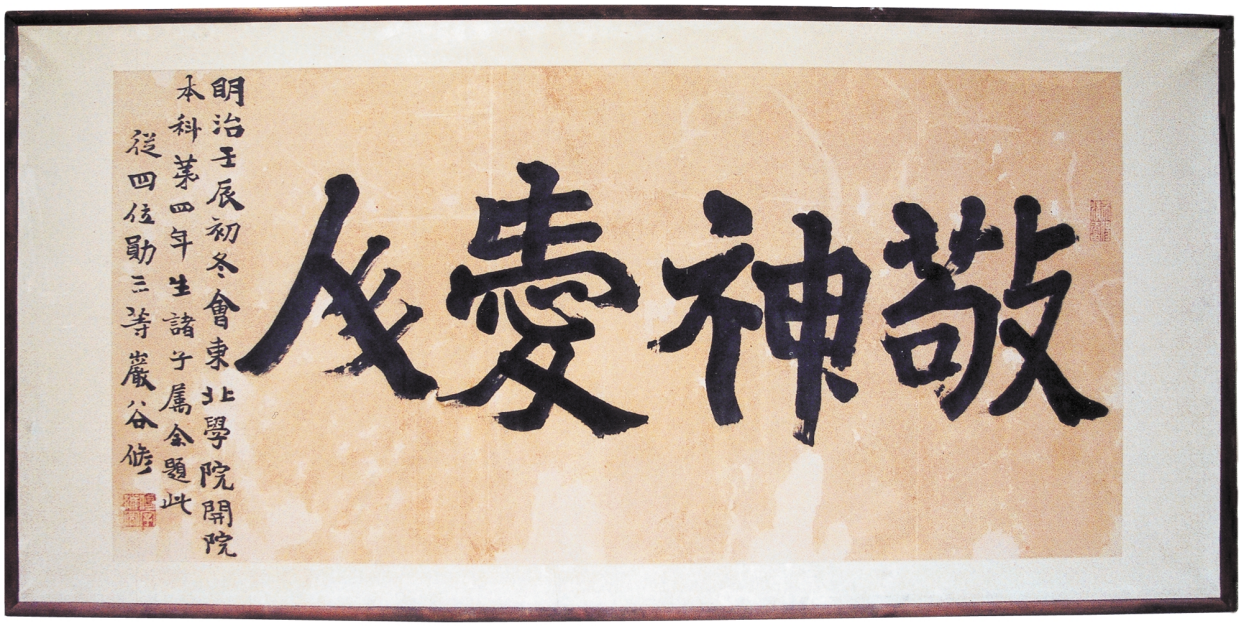




# 「敬神愛人」の書

明治25（1892）年、仙台神学校から東北学院と改称された開院式で、神学校本科４年の学生たちが寄贈し、新校舎の講堂に掲げられた書です。当時の書家、巌谷修の揮毫になるもので、仙台神学校以来の書画として現存する唯一のものです。長く本館２階会議室に掲げられていましたが、平成13（2001）年、礼拝堂地下に開設された東北学院資料室に飾られ、現在に至っています。

「敬神愛人」とは新約聖書マタイによる福音書の「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」という言葉を意訳した「敬神」と、「隣人を自分のように愛しなさい」を簡単にした「愛人」、すなわち「神への愛と隣人への愛」を簡潔に意訳した言葉で、東北学院の建学の精神そのものです。



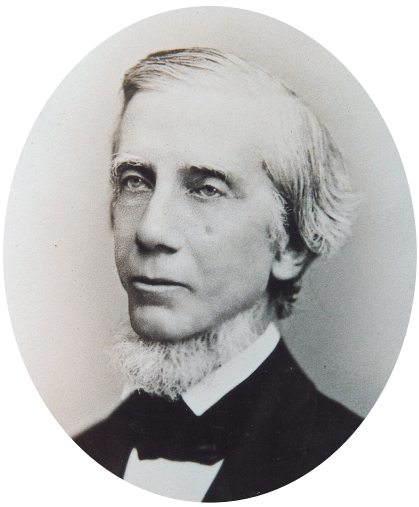
# ケルカー記念図書館（写真）

東北学院最初の図書館。明治24（1891）年に完成した仙台神学校の校舎の一室に設けられました。その名前の由来は、当時、合衆国改革派教会外国伝道局の財務局長であったルドルフ・F・ケルカー氏の東北学院に対する長年にわたる功績によると言われております。

「東北学院七十年史」の「ケルカー記念図書館」の項には、「・・・その頃米国の外国伝道局の会計であるルドルフ・エフ・ケルカーは学院の図書室の設備に対して特別な関心を示して、よく選択された約千五百冊の図書を供給した。ここで初めて図書館らしい設備ができたので、それをケルカー記念図書館と称した・・・・」とあります。

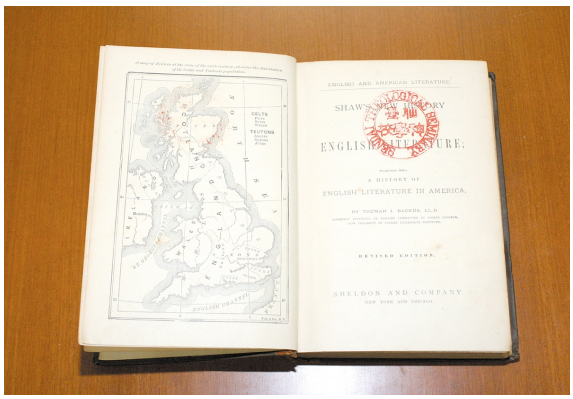
ケルカー氏は若い在日宣教師たちの良き相談相手であり、また、物心両面にわたって惜しみない援助を与え続けてきた人物です。特にウィリアム・ホーイとの間には特別の信頼関係があり、両者の間で交わされた数百通の手紙が現在も残っています。ホーイは手紙の中で、新校舎に図書館を作りたいという願望を切々と訴えています。それまでの図書室は書籍らしい書籍もなく、ウェブスター大辞典一冊と新聞だけという乏しい状況にありました。ホーイの伝道局宛手紙の中には、「ファーザー・ケルカーが図書館に彼の名前をつけることを許してくださったら、これはまた私たちの喜びです。まさにふさわしいことですから」という記述もみられます。

現在、蔵書数110万冊を数える東北学院大学図書館の第一歩がここから始まったのです。



ルドルフ・F・ケルカー氏

ケルカー記念図書館




現存するケルカー記念図書館蔵書（東北学院大学中央図書館）

# 東北学院創立122周年記念式

式辞を述べる赤澤理事長

5月15日、ラーハウザー記念東北学院礼拝堂において、創立122周年記念式並びに永年勤続（25年）表彰が行われた。赤澤昭三理事長は式辞の中で、隣接する東北大学片平キャンパスの一部取得を視野に入れた土樋キャンパスの拡充整備計画の具体化について審議を進めつつあることを述べた。加えて、厳しい競争環境の最中にある東北学院の現状と将来について、誠実な広報活動を積極的に展開していくことが必要不可欠である、と続けた。

永年勤続（25年）受賞教職員

## 墓前礼拝

記念式のあと、三校祖をはじめ多くの先人たちが眠る北山墓地において墓前礼拝が行われ、赤澤理事長、星宮学院長・大学長が献花を行った。中学校・高等学校、榴ケ岡高等学校でも記念式に引き続いて、校祖墓前礼拝がささげられた。

献花をする赤澤理事長

中学校・高等学校墓前礼拝

榴ケ岡高等学校の墓前礼拝

# 榴ケ岡高等学校体育館・管理棟献堂式

4階ホール（ステンドグラスにはイエスと12人の榴生が描かれている）

9月1日、榴ケ岡高等学校に新築となった体育館で、体育館・管理棟の献堂式が行われた。完成した体育館および管理棟は、建築面積2198.41平方メートル、延べ面積5192.05平方メートル、鉄筋コンクリート造の四階建で、高さは26.575メートル。

体育館は一階に第一アリーナ、三階に第二アリーナがあり、いずれも大きな吹き抜けが開放感にあふれた空間を実現している。また、中二階部分には卓球場（10台）が配されている。

第一アリーナ

体育館外観

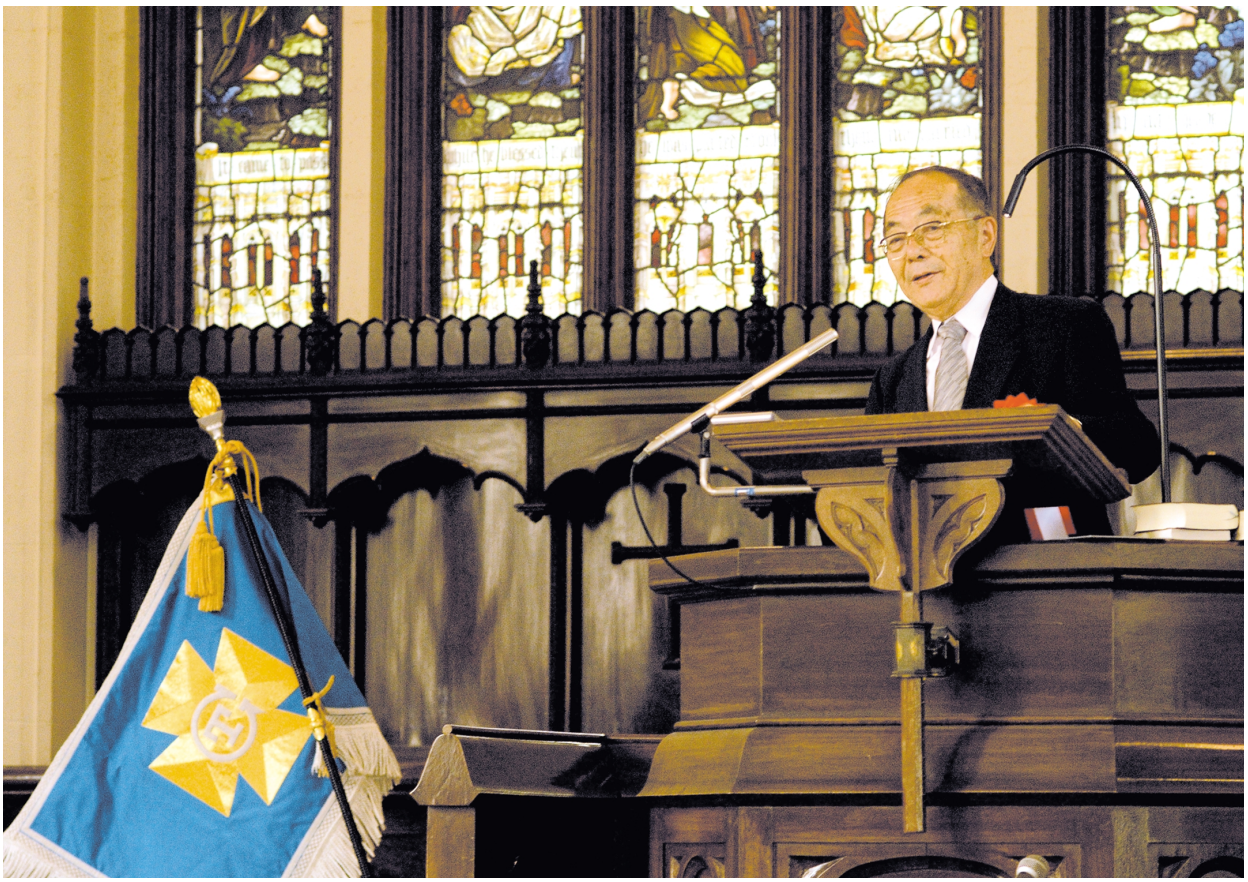
# 第９回ホームカミングデー『同窓祭』

**平成20年10月4日(土)**

東北学院大学で学んだ者同士が旧交を温め合い、懐かしい友人や教職員と再会を喜び合うホームカミングデーが10月4日土樋キャンパスで開催された。星宮望学院長・大学長・同窓会長の歓迎の言葉に続き、名誉教授・元経済学部長の山本新一氏を迎えて特別講義が行われ、同窓生は学生時代の日々に戻ったかのような時間を過ごした。

歓迎のあいさつをする星宮望学院長

讃美歌斉唱



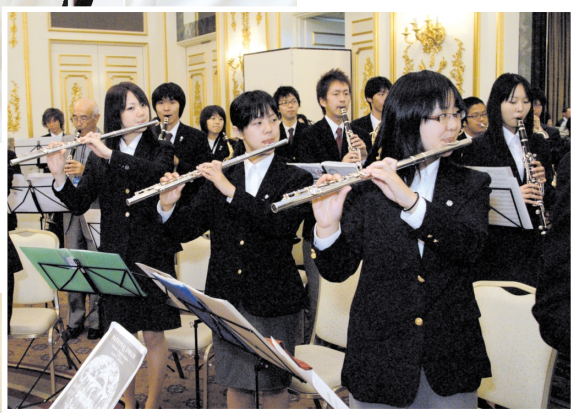
特別講義をする山本新一名誉教授

## 懐かしい出会いの夕べ

会場を江陽グランドホテルに移して、記念パーティーが開催された。同窓生で歌手のさとう宗幸氏（昭47経経卒）とＳＷＥの同窓生で構成されたモッシージャズオーケストラのジョイントコンサートや応援団・ＳＷＥ・チアリーディングチームによる応援歌などの催しに参加した350人の同窓生は心行くまで楽しんだ。

記念パーティー

モッシージャズオーケストラ



シンフォニック・ウィンド・アンサンブル（SWE）

チアリーディングチーム

名誉教授紹介

熱唱するさとう宗幸氏

華やかなパーティー会場

グリークラブOB合唱団

# 教養学部創設20周年記念式典・同窓会設立

平成元年、泉キャンパスに「真の教養人を育てる」という理念のもと、本学第5番目の学部として新設された教養学部は今年で20周年を迎えた。これを記念して教養学部では10月18日同窓会を設立、記念祝賀会、市民参加のフォーラムや講義、チェロ演奏会など多彩な行事を開催した。

記念祝賀会

鈴木秀美氏によるチェロ演奏（12月2日）

# 東北学院文化講演会2008

## ― 秋田県で開催 ―

11月22日、秋田市文化会館において市民や同窓生など約150人が参加して「東北学院文化講演会2008」が開催された。大塚浩司本学学務担当副学長による「最近のコンクリート事情ーコンクリート構造物の耐震・長寿命化を考えるー」と題して講演が行われた。同日、秋田県合同同窓会も開催され、楽しいひと時を過ごした。

講演する大塚副学長

# 博物館起工式

鍬入れをする平河内理事長

博物館建築イメージ

12月4日、東北学院大学博物館の起工式が挙行され、建設工事が始まった。平成21年3月竣工、秋には開館を目指している。展示は歴史学科の研究成果を中心に構成されており、考古学ゼミナールで発掘した旧石器や古墳出土資料が展示予定である。

博物館の設置場所は、新愛宕橋へと続く国道4号線に面した西側の敷地で、図書館敷地と背中合わせの位置にあたる。

# クリスマス

東北学院ではクリスマスを待ち望むアドベント（待降節）に入ると、礼拝堂入口や樹木にイルミネーションが輝き、礼拝堂にはクリスマスツリーが飾られる。そして祭壇のキャンドルに火が灯り、全学院でキリスト降誕を祝う行事が続いた。

同窓生や市民の方々を迎えての「公開クリスマス」、大学生対象の「クリスマス礼拝」、幼稚園や中学校・高等学校、榴ケ岡高等学校でもそれぞれクリスマスを祝った。

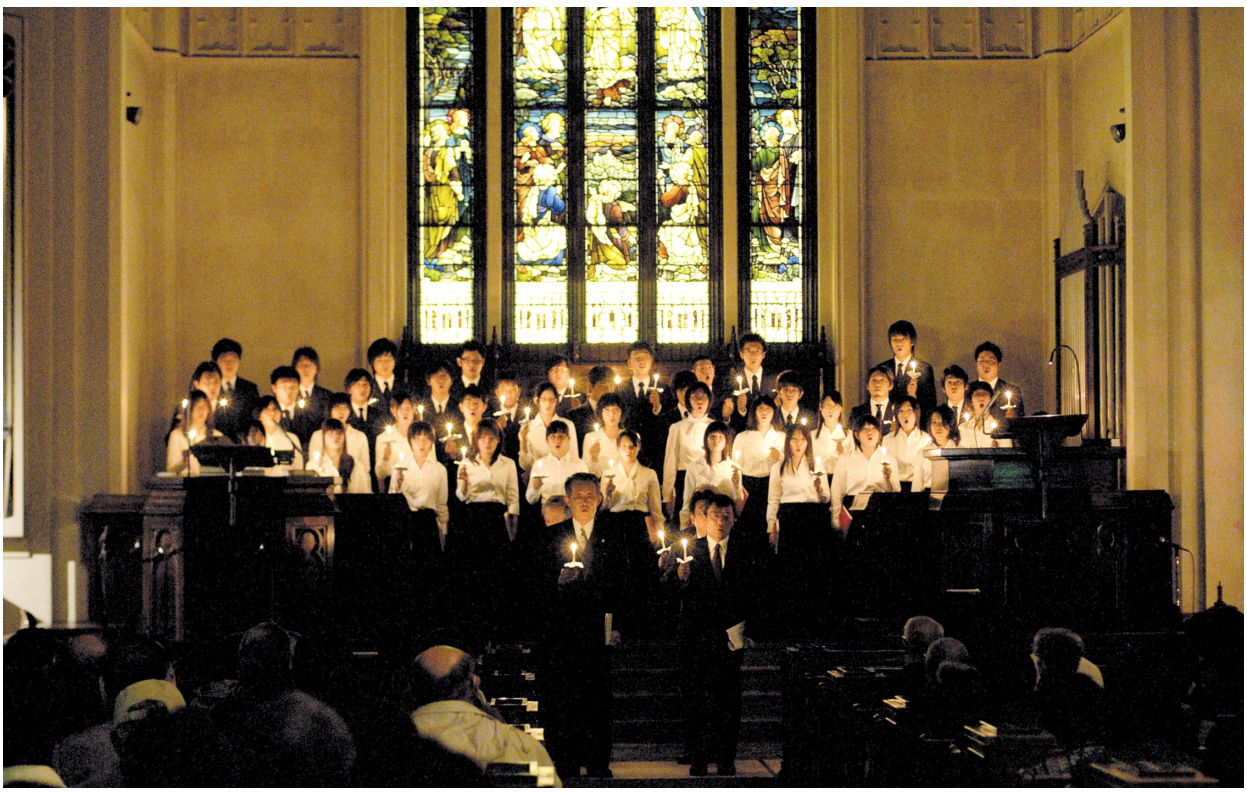
幼稚園

榴ケ岡高等学校

中学校・高等学校

泉キャンパスクリスマス

公開東北学院クリスマス



# 2008（平成20）年時事

| 東北学院に関する主な時事 | | |
|---|---|---|
| 1月 | 9日 | 中学校入学試験 |
| | 10日 | 大学TG推薦入学試験合格発表／中学校入学試験合格発表 |
| | 15日 | TG十五日会 |
| | 16日 | 教養学部4年奥山泰裕選手のジェフユナイテッド市原・千葉（サッカーＪ1）入団記者会見 |
| | 18日 | 外国人留学生歓送会（仙台国際ホテル） |
| | 19日 | 大学入試センター試験（～20日） |
| | 28日 | 弓道部OB会より弓道用具寄贈 |
| | 29日 | 仙台市都市景観賞表彰式　ーラーハウザー記念東北学院礼拝堂を中心とした景観が受賞（仙台市）ー |
| 2月 | 1日 | 大学一般入学試験前期日程（～3日）／高等学校入学試験 |
| | 2日 | 法科大学院後期日程入学試験（～3日） |
| | 3日 | 外国人留学生特別入学試験 |
| | 4日 | 榴ケ岡高等学校入学試験 |
| | 5日 | 高等学校入学試験合格発表 |
| | 8日 | 榴ケ岡高等学校入学試験合格発表 |
| | 10日 | 大学一般入学試験前期日程・センター試験利用入学試験前期・外国人留学生特別入学試験合格発表 |
| | 15日 | TG十五日会／TG推薦誓約式／法科大学院後期日程入学試験合格発表 |
| | 18日 | 経済学部改組記者会見 |
| | 20日 | 大学院入学試験（前期課程） |
| | 21日 | 大学院入学試験（後期課程） |
| | 29日 | 大学院入学試験合格発表 |
| 3月 | 1日 | 高等学校卒業式／榴ケ岡高等学校卒業式 |
| | 5日 | 転学部・転学科試験、編入学試験（B日程）、夜間主コース社会人特別入学試験（B日程）、再入学試験 |
| | 6日 | 大学一般入学試験後期日程 |
| | 13日 | 大学一般入学試験後期日程、センター利用入学試験後期、夜間主コース社会人特別入学試験B日程、編入学試験B日程、転学部・転学科試験、再入学試験合格発表 |
| | 14日 | TG十五日会 |
| | 15日 | 幼稚園卒園式 |
| | 22日 | 同窓会東京支部設立100周年記念祝賀会 |
| | 24日 | 大学卒業式・学位記授与式 |
| | 25日 | 中学校卒業式 |
| | 31日 | 退職者辞令交付式 |
| 4月 | 1日 | 役職者等辞令交付式／人事異動辞令交付式／新任職員辞令交付式 |

| 東北学院に関する主な時事 | | |
|---|---|---|
| | | 法人事務局長に高橋清昭氏が就任 |
| | | 庶務部長に日野哲氏が就任 |
| | | 情報システム部長に松澤茂氏が就任 |
| 4月 | 3日 | 大学入学式 |
| | 8日 | 中学校・高等学校入学式 |
| | 9日 | 榴ケ岡高校入学式 |
| | 11日 | 幼稚園入園式 |
| | 15日 | TG十五日会 |
| | 16日 | 榴ケ岡高等学校イースター礼拝 |
| | 18日 | 幼稚園イースター礼拝 |
| | 19日 | せんだい・杜の都親善大使に本学言語文化学科1年の齋藤亜未さん |
| | 21日 | 中学校・高等学校イースター礼拝 |
| | 28日 | 中学校・高等学校奨学会総会 |
| 5月 | 8日 | 中学校・高等学校運動会 |
| | 10日 | 青森地区大学オープンキャンパス／榴ケ岡高等学校奨学会総会 |
| | 13日 | 大学春季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～14日） |
| | 15日 | 創立122周年記念式／墓前礼拝／TG十五日会／平成20年度同窓会総会／全国支部長・TG会長会議 |
| | 16日 | 山東大学威海分校（中国）と国際交流協定締結 |
| | 17日 | 大学後援会総会 |
| | 18日 | 秋田地区大学オープンキャンパス |
| | 21日 | 名誉教授称号記授与式 |
| | 26日 | 日本研究夏季講座（～6月13日） |
| | 31日 | 対青山学院大学総合定期戦（青山学院大学主管）（～6月2日） |
| 6月 | 2日 | 6月1日付人事異動に伴う辞令交付式 |
| | | 第15代理事長に平河内健治氏就任 |
| | | 常任理事（人事担当）に関谷登氏就任 |
| | | 中学校・高等学校副校長に岩上敦郎氏就任 |
| | 7日 | 県高校総体（～9日） |
| | 11日 | 戦略的大学連携支援事業を文部科学省に申請 |
| | 13日 | TG十五日会／第54回北海学園大学総合定期戦（本学主管・～15日）／日本研究夏季講座修了式・歓送会 |
| | 14日 | 市中総体（～16日）／岩手・宮城内陸地震発生（午前8時43分発生）2校時以降休講とする（大学） |
| | 26日 | 県内高校進学指導者懇談会 |
| | 28日 | 文・経・法・工学部オープンキャンパス／大学院博士前期課程（修士課程）A日程入学特別選考（人間情報学研究科） |

| 東北学院に関する主な時事 | | |
|---|---|---|
| 7月 | 5日 | 教養学部オープンキャンパス／宗教音楽研究所主催「宗教音楽の夕べ」 |
| | | 大学院博士前期課程（修士課程）A日程入学特別選考（文学・経済学・法学・工学研究科） |
| | 11日 | 大学院博士前期課程（修士課程）A日程入学特別選考合格発表 |
| | 12日 | 中学校・高等学校オープンキャンパス |
| | 15日 | TG十五日会／集中日本語講座修了式 |
| | 16日 | インターンシップ　ー事業所と学生の顔合わせ会ー／榴ケ岡高等学校球技大会（～17日） |
| | 21日 | 泰日工業大学（タイ）との国際交流協定締結 |
| | 22日 | 榴ケ岡高等学校海外研修（～8月9日） |
| | 28日 | 第34回大学宗教部「サマー・カレッジⅠ」開催（～30日） |
| | | 2008年度第36回アメリカ研究アーサイナス大学夏期留学（～8月27日） |
| 8月 | 2日 | 全学オープンキャンパス（泉）／（多賀城～3日） |
| | 4日 | 大学宗教部「サマー・カレッジII」開催（～5日） |
| | 9日 | 対青山学院大学二部交流定期戦 |
| | 19日 | 文部科学省による戦略的大学連携支援事業採択 |
| | 23日 | 榴ケ岡高等学校オープンキャンパス |
| | 30日 | 法務研究科前期日程入学試験（～31日） |
| 9月 | 1日 | 榴ケ岡高等学校体育館及び管理棟新築工事定礎式・献堂式 |
| | 2日 | 大学教職員修養会（～3日）／中学・高校　TGスポーツ大会（～3日） |
| | 5日 | 榴ケ岡高等学校“榴祭”（～6日） |
| | 6日 | 中学校・高等学校“学院祭”（～7日） |
| | 8日 | 日本研究秋期講座（～12月8日）／集中日本語講座（～翌年7月31日） |
| | 11日 | 新司法試験合格者発表で本学法科大学院生7名が合格 |
| | 12日 | TG十五日会／法務研究科前期日程入学試験合格発表 |
| | 20日 | 幼稚園　運動会 |
| | 27日 | 大学院特別選考（B日程）入学試験および一般（秋季）入学試験 |
| | 30日 | 9月期卒業証書・学位記授与式 |
| 10月 | 3日 | 大学院特別選考（B日程）入学試験合格発表および一般（秋季）入学試験合格発表 |
| | 4日 | 大学ホームカミングデー／東北産業経済研究所公開シンポジウム |

| 東北学院に関する主な時事 | | |
|---|---|---|
| 10月 | 8日 | 大学秋季宗教教育強調週間特別伝道礼拝（～9日） |
| | 10日 | 榴ケ岡高等学校　強歩大会 |
| | 11日 | 工学部祭（～12日）／工学部オープンキャンパス |
| | 12日 | 泉キャンパス祭（～13日）／教養学部オープンキャンパス |
| | 14日 | TG十五日会 |
| | 17日 | 六軒丁祭(～19日)／教養学部教授今井奈緒子オルガン演奏会 |
| | 18日 | 教養学部創設20周年記念式典並びに教養学部同窓会設立総会開催 |
| | 22日 | 榴ケ岡高等学校　私学振興大会 |
| | 25日 | オープン・リサーチ・センターシンポジウム「民族・宗教・共生」 |
| | 31日 | 宗教改革記念礼拝（中学・高校、榴ケ岡） |
| 11月 | 2日 | 幼稚園　造形展（～3日） |
| | 6日 | 中学・高校マラソン大会 |
| | 7日 | 新入職員フォローアップ研修／東北地区私立大学就職問題協議会30周年記念研究会 |
| | 13日 | 推薦入学試験・AO入学試験（A日程）・夜間主コース社会人特別入学試験（A日程） |
| | 14日 | TG十五日会 |
| | 15日 | 法科大学院東北地域貢献者AO入学試験（第2期） |
| | 21日 | 推薦入試・AO入試（A日程）・夜間主コース社会人特別入試（A日程）・法科大学院東北地域貢献者AO入試（第2期）合格発表 |
| | | 荻野由美子オルガン演奏会 |
| | 22日 | 東北学院文化講演会2008 |
| 12月 | 2日 | 教養学部創設20周年記念演奏会＆トーク（チェロ奏者　鈴木秀美） |
| | 4日 | 博物館新築工事起工式 |
| | 5日 | 第20回泉キャンパスクリスマス |
| | 6日 | 現職教員研修セミナー |
| | 8日 | 日本研究秋期講座閉講式 |
| | 10日 | 大学クリスマス礼拝（～11日） |
| | 12日 | 第59回公開東北学院クリスマス礼拝 |
| | 15日 | TG十五日会 |
| | 18日 | 幼稚園クリスマス |
| | 22日 | 中学校・高等学校、榴ケ岡高等学校クリスマス礼拝 |
| | 24日 | 職員クリスマス |

# 2008（平成20）年受贈資料一覧

2008年1月～12月

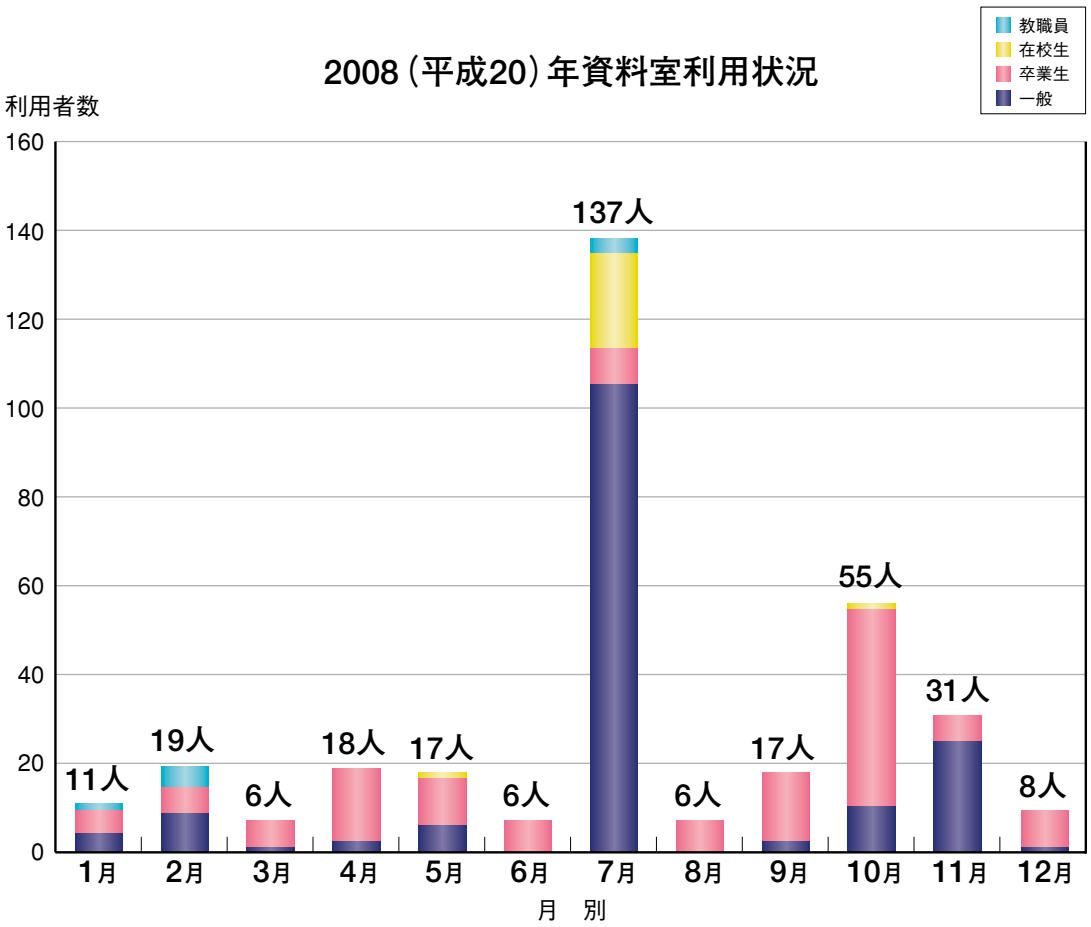
| 日　付 | 寄　贈　者 | 受　贈　資　料 |
|---|---|---|
| 2008.1 | 宮城学院資料室 | Ｅ・Ｒ・プールボー書簡集 |
| 2008.3 | 明治学院大学 | 賀川豊彦の海外資料 |
| 2008.3 | 明治学院大学 | 賀川豊彦の海外資料　II |
| 2008.4 | 立教学院 | ミッション・スクールと戦争ー立教学院のディレンマ |
| 2008.5 | 矢澤俊彦 | 鶴岡の荘内教会宣教物語　明治から昭和初期まで |
| 2008.5 | 東京電機大学 | 図録　東京電機大学100年 |
| 2008.5 | 東京電機大学 | 学校法人東京電機大学百年史　正史編 |
| 2008.5 | 東京電機大学 | 学校法人東京電機大学百年史　資料編 |
| 2008.5 | 広島大学文書館 | 広島大学文書館外部評価報告書 |
| 2008.6 | 京都大学 | 大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究 |
| 2008.6 | 拓殖大学 | 拓殖大学百年史　資料編六(資料編海外兄弟校含) |
| 2008.6 | 京都大学大学文書館 | 「戦後学生運動関係資料」解説・目録 |
| 2008.7 | 財団法人野間研究所 | 大学生の読書状況に関する教育心理的考察　野間教育研究所紀要46集 |
| 2008.7 | 財団法人野間研究所 | 学校沿革史の研究　総説　野間教育研究所紀要第47集 |
| 2008.9 | 神奈川大学 | 教育は人を造るにあり　米田吉盛の生涯 |
| 2008.9 | 東京農業大学 | 榎本武揚と横井時敬　東京農大二人の学祖 |
| 2008.9 | 大木騏一郎 | 大路ひとすじに―東北学院東二番丁青春譜― |
| 2008.11 | 出村彰 | William Mensendiek:Memoirs of an Unapologetic Missionary（複写原稿） |
| 2008.12 | 伊勢文夫 | 宮城学院ウォッチング　100 |
| 2008.12 | 学校法人東洋学園 | 東洋学園八十年の歩み　1926-2006 |

※主な受贈資料のみを掲載

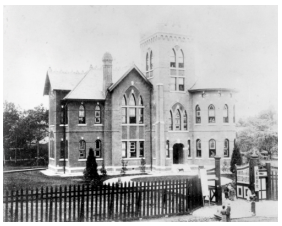
# 2008（平成20）年資料室来室状況

**2008年**

| | |
|---|---|
| 1月15日 | 国立公文書館アジア歴史資料センター関係の方（2名） |
| 2月15日 | TG推薦入学誓約式参加保護者（2名） |
| | 宮内庁職員の方（2名） |
| 2月26日 | 東北学院新任職員（4名） |
| 4月11日 | 東北学院大学卒業生（3名） |
| 4月17日 | 東北学院大学昭和33年文経学部経済学科卒業生（8名） |
| 5月14日 | 東北学院大学昭和41年文経学部経済学科卒業生（3名） |
| 7月5日 | 仙台荒町市民グループ「人生銀行」の方々（100名） |
| 7月10日 | 鈴木義男御親族の方（1名） |
| 7月30日 | 国立公文書館の方（1名） |
| 9月10日 | 東北学院大学昭和50年工学部応用物理学科卒業生（6名） |
| 10月4日 | ホームカミングデー（約40名） |
| 10月22日 | いざよい会（6名） |
| 11月15日 | NHK文化センター定禅寺通教室受講生と講師（25名） |



# 東北学院の沿革

| 年　代 | 歴代役職者 | 事　　項 |
|---|---|---|
| 1886（明治19）年 | | W.E.ホーイ仙台着任（１月）。押川方義、W.E.ホーイ両名により、キリスト教伝道者養成の目的をもって仙台市木町通に「仙台神学校」開設（５月）。教師２名、生徒６名で始まった。E.R.プルボー、M.B.オールトが来日（７月）、宮城女学校を創立（９月）。 |
| 1887（明治20）年 | | 東二番丁の本願寺別院跡を取得し、仙台教会と仙台神学校を移転（５月）。 |
| 1888（明治21）年 | | D.B.シュネーダー夫妻仙台着任（１月）。オールト記念館落成（11月）。 |
| 1891（明治24）年 | 押川方義 | 南町通りに仙台神学校校舎が完成（９月）。校名を「東北学院」と改称し、神学生のみに限らず、広く生徒を募集し、普通科を設置。予科２年・本科４年・神学部３年とする。  |
| 1892（明治25）年 | | 労働会創設（３月）。東北学院理事局を組織、初代院長に押川方義、副院長・理事局長にホーイ就任（８月）。東北学院開院式（11月）。 |
| 1895（明治28）年 | W.E.ホーイ | 予科・本科を改組し、普通科５年、その上に専修部（文科・理科）２年を設置。 |
| 1896（明治29）年 | | 島崎春樹（藤村）、作文・英語教師として着任。 |
| 1898（明治31）年 | | 理科専修部を廃止。 |
| 1900（明治33）年 | D.B.シュネーダー | 第２代理事局長にD.B.シュネーダー就任（10月）。 |
| 1901（明治34）年 | | 第２代院長にD.B.シュネーダー就任。普通科長に笹尾粂太郎就任（４月）。普通科に制帽を制定。徽章ＴＧ章制定。 |
| 1903（明治36）年 | 笹尾粂太郎 | 東北学院同窓会結成。 |
| 1904（明治37）年 | | 全校を普通科（５年）と専門学校令による専門科（３年）とに分け、専門科に文学部と神学部とを置く。専門科長に出村悌三郎就任（４月）。 |
| 1905（明治38）年 | 田中四郎 | 専門科を専門部、文学部を文科、神学部を神学科と改称。東二番丁に普通科校舎完成。専門部に角帽を制定。徽章は全校ＴＧ章を用いる。普通科長に田中四郎就任（９月）。 |
| 1906（明治39）年 | | 普通科寄宿舎完成。 |
| 1908（明治41）年 | | 「社団法人東北学院」設置。創立記念日を５月15日に定める。同窓会会報第１号発行。 |
| 1910（明治43）年 | | 校旗制定。 |
| 1911（明治44）年 | | 創立25周年記念式典挙行。 |
| 1915（大正４）年 | | 普通科を中学部と改称（５月・生徒数357名）。中学部長は田中四郎。 |
| 1916（大正５）年 | | 『東北学院時報』創刊（１月）。南六軒丁（現大学土樋キャンパス）に専門部校地取得。 |
| 1918（大正７）年 | | 専門部を改組、神学科・文科・師範科・商科とする。 |

| 年　代 | 歴代役職者 | 事　　項 |
|---|---|---|
| 1919（大正８）年 | 五十嵐正 | 仙台大火のため中学部校舎・寄宿舎全焼（３月）。仮校舎建築（９月）。 |
| 1920（大正９）年 | | 中学部長に五十嵐正就任（１月）。 |
| 1921（大正10）年 | | 創立35周年記念式典挙行。 |
| 1922（大正11）年 | | 中学部校舎再建（６月）〈東二番丁・通称赤レンガ校舎〉。中学部寄宿舎再建。 |
| 1923（大正12）年 | | 東北学院教会設立（５月）。 |
| 1925（大正14）年 | | 神学科を専門部より分離し、神学部（第１科・第２科）とする。専門部は文科、師範科、商科となる。 |
| 1926（大正15）年 | | 南六軒丁に専門部校舎完成（現土樋本館）、９月より使用。創立40周年記念式ならびに専門部校舎落成式を挙行（10月）。 |
| 1928（昭和３）年 | | 専門部３科とも予科を廃し、４年制とする。ハウスキーパー記念社交館完成（３月）。 |
| 1929（昭和４）年 | | 専門部を高等学部と改称。神学部第２科を廃止、第１科を神学部本科と改称し、３年の予科を置く。「財団法人東北学院」を設置（８月）。 |
| 1930（昭和５）年 | | 高等学部師範科に専攻科１年を置く。 |
| 1932（昭和７）年 | | 高等学部は３学期制を２学期制に改める。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂完成（３月）。労働会寄宿舎を廃止。中学部寄宿舎を廃止し、神学部寄宿舎をその跡に移す。 |
| 1933（昭和８）年 | | 高等学部制帽を角帽より丸帽に改める。 |
| 1934（昭和９）年 | | 神学部、南六軒丁ブラッドショウ館に移る。 |
| 1936（昭和11）年 | 出村悌三郎 | 高等学部文科を文科第一部、師範科を文科第二部と改称。創立50周年記念式典を挙行。院長シュネーダー、「我は福音を恥とせず」と題する説教を行う。第３代院長に出村悌三郎就任（５月）。旧労働会建物および敷地を売却。第３代理事長にE.H.ゾーグ就任（６月）。 |
| 1937（昭和12）年 | E.H.ゾーグ | 神学部廃止、日本神学校と合同（３月）。高等学部は3年制となる。高等学部長にゾーグ就任（４月）。 |
| 1938（昭和13）年 | | 中学部長に田口泰輔就任（４月）。 |
| 1939（昭和14）年 | 田口泰輔 | 中学部長に出村剛就任（４月）。 |
| 1940（昭和15）年 | | 南町通り旧神学部校舎および敷地を売却。東北学院維持会を組織。花淵浜高山に修養道場建築用地を取得。第４代理事長に出村悌三郎就任（10月）。 |
| 1941（昭和16）年 | 小泉要太郎 | 高等学部長に出村剛、中学部長に小泉要太郎就任（４月）。 |
| 1942（昭和17）年 | | 高等学部商科第二部および中学部第二部を設置（ともに夜間）。 |
| 1943（昭和18）年 | | 高等学部商科を高等商業部、中学部を東北学院中学校と改称。中学校長に出村悌三郎院長が兼務（４月）。 |

| 年　代 | 歴代役職者 | 事　　項 |
|---|---|---|
| 1944（昭和19）年 | 杉山元治郎 | 航空工業専門学校設置。航空工業専門学校長に宮城音五郎就任（４月）。第５代理事長に杉山元治郎就任（６月）。 |
| 1945（昭和20）年 | | 中学校長に出村剛就任（４月）。航空工業専門学校を工業専門学校と改称（12月）。中学校校舎空襲により焼失。 |
| 1946（昭和21）年 | 出村剛 | 高等商業部および同第二部を廃止（３月）。東北学院専門学校（英文科・経済科）および同第二部を設置。第４代院長に出村剛就任。中学校長に月浦利雄就任（４月）。専門学校長に出村剛就任（４月）。 |
| 1947（昭和22）年 | | 工業専門学校廃止。新制中学校設置。専門学校校舎木造２階建４教室増築完成。第６代理事長に鈴木義男就任（７月）。 |
| 1948（昭和23）年 | 月浦利雄 | 新制高等学校、同第二部を設置。月浦利雄同校等学校長ならびに中学校長兼任（４月）。専門学校長に小田忠夫就任（４月）。 |
| 1949（昭和24）年 | | 東北学院専門学校から新制大学に昇格。東北学院大学文経学部（４年制、英文学科・経済学科）を設置。小田忠夫初代学長に就任。東九番丁寄宿舎完成。 |
| 1950（昭和25）年 | 鈴木義男 | 専門学校二部を東北学院短期大学部（２年制、英文科・経済科）と改称。第５代院長にA.E.アンケニー就任（３月）。 |
| 1951（昭和26）年 | | 「学校法人東北学院」を設置。専門学校を廃止。短大別科を設置。第６代院長に小田忠夫就任。中高理科教室鉄筋コンクリート３階建完成。 |
| 1952（昭和27）年 | A.E.アンケニー | 短期大学部に法科を設置。 |
| 1953（昭和28）年 | | 中学高等学校分離、中学校長に五十嵐正躬就任（４月）。総合運動場を多賀城に開設。シュネーダー記念東北学院図書館完成（10月）。 |
| 1954（昭和29）年 | 小田忠夫 | 多賀城第２寄宿舎完成。 |
| 1955（昭和30）年 | | 創立70年記念式典挙行。中学校校舎鉄筋コンクリート３階建９教室完成。『東北学院創立七十年写真誌』を刊行（５月）。在米同窓生、創立70年記念として鐘を寄贈（12月）。蔵王にTGヒュッテ「栄光」完成。 |
| 1956（昭和31）年 | 五十嵐正躬 | 中学・高等学校体育館完成（３月）。W.E.ホーイ碑、出村悌三郎墓を北山墓地に建立（４月）。大学音楽館完成（10月）。 |
| 1958（昭和33）年 | | 中学校赤レンガ校舎は都市計画により９教室を失う（４月）。中学・高等学校鉄筋コンクリート造４階建８教室完成（４月）。大学体育館「アセンブリー・ホール」完成（９月）。 |
| 1959（昭和34）年 | | 中学高等学校一本化、中学校長に月浦利雄高等学校長兼務（１月）。短期大学部を東北学院大学文経学部二部（英文学科・経済学科）に改組。高等学校榴ケ岡校舎を開設。『東北学院七十年史』を刊行（７月）。大学研究棟鉄筋コンクリート造４階建完成（９月）。自然科学研究室青根分室を開設（10月）。 |
| 1960（昭和35）年 | | 短期大学部を廃止（３月）。 |
| 1961（昭和36）年 | | 文経学部英文学科に専攻科を設置。 |
| 1962（昭和37）年 | | 多賀城町（現多賀城市）に東北学院大学工学部（機械工学科、電気工学科、応用物理学科）を設置。同校地に東北学院幼稚園を開設。初代幼稚園長に小田忠夫院長が就任（４月）。 |

| 年　代 | 歴代役職者 | 事　　項 |
|---|---|---|
| 1963（昭和38）年 | | 押川記念館完成（２月）。工学部寄宿舎開設。大学オーディオ・ヴィジュアルセンター完成。野間記念剣道場完成（７月）。第７代理事長に杉山元治郎就任（９月）。 |
| 1964（昭和39）年 | <br>山根篤 | 東北学院大学文経学部一部・二部を文学部一部・同二部および経済学部一部・同二部に改組。大学院文学研究科英語英文学専攻修士課程を設置。大学64年館完成（10月）。第８代理事長に山根篤就任（11月）。 |
| 1965（昭和40）年 | | 東北学院大学法学部（法律学科）および大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を設置。宮城郡泉町市名坂字天神沢（現仙台市泉区天神沢）に10万坪の校地を取得（５月）。同窓会にＴＧ15日会発足（５月15日）。工学部４号館完成（10月）。中学校新校舎、中高礼拝堂完成（11月）。大学土樋寄宿舎完成。 |
| 1966（昭和41）年 | | 大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻修士課程を設置。創立80周年記念式典挙行。大学66年館完成（６月）。大学泉寄宿舎完成。青根セミナーハウス完成。 |
| 1967（昭和42）年 | | 工学部に土木工学科を増設。大学院経済学研究科財政金融学専攻修士課程を経済学研究科経済学専攻修士課程に改組。大学67年館完成（５月）。中学・高等学校向山寄宿舎開設。中学・高等学校運動部室完成（３月）。 |
| 1968（昭和43）年 | | 大学院経済学研究科経済学専攻博士課程、工学研究科応用物理学専攻博士課程を設置。工学部５号館・６号館完成（３月）。大学新研究棟68年館完成（８月）。中学・高等学校弓道場完成（３月）。『東北学院大学学報』第１号創刊。 |
| 1969（昭和44）年 | | 第９代理事長に月浦利雄就任（３月）。工学部旭ケ丘寄宿舎開設。 |
| 1970（昭和45）年 | | 工学部校地に東北学院プール完成。 |
| 1971（昭和46）年 | <br>二関敦 | 大学院工学研究科機械工学専攻修士課程、電気工学専攻修士課程を設置。倉石ヒュッテ完成。中学高等学校長に二関敬就任（９月）。榴ケ岡高等学校長に五十嵐正躬就任（９月）。大学文団連棟焼失（９月）。 |
| 1972（昭和47）年 | | 榴ケ岡高等学校として独立（４月）。高山セミナーハウス完成（７月）。泉市市名坂（現仙台市泉区市名坂）に榴ケ岡高等学校校舎が完成移転（８月）。榴ケ岡高等学校体育館完成（12月）。 |
| 1973（昭和48）年 | | 東北学院同窓会館完成（４月）。米国アーサイナス大学に第１回夏期留学生を派遣。中学・高等学校寄宿舎完成。幼稚園長に渡辺平八郎就任（7月）。 |
| 1974（昭和49）年 | | 大学院工学研究科機械工学専攻博士課程および電気工学専攻博士課程設置。第10代理事長に小田忠夫就任（3月）。 |
| 1975（昭和50）年 | | 大学院法学研究科法律学専攻修士課程設置。大学67年館増築完成（６月）。 |
| 1976（昭和51）年 | <br>田口誠一 | 創立90周年記念式典挙行。 |
| 1977（昭和52）年 | | 中学・高等学校長に田口誠一就任（４月）。榴ケ岡高等学校長に小田忠夫院長兼任（４月）。 |
| 1978（昭和53）年 | | 大学90周年記念館完成（２月）。榴ケ岡高等学校長に清水浩三就任（４月）。中学・高等学校赤レンガ校舎、宮城県沖地震のため一部倒壊（５月）。ＴＧヒュッテ焼失（８月）。ラーハウザー記念東北学院礼拝堂（土樋キャンパス礼拝堂）に新パイプオルガンを設置（11月）。 |
| 1979（昭和54）年 | <br>清水浩三 | 大学院法学研究科法律学専攻博士後期課程を設置。工学部計算センター完成（３月）。中学・高等学校赤レンガ校舎見送り式（３月）。大学78年館および部室棟完成（９月）。ＴＧヒュッテ再建（10月）。東北学院展開催（十字屋仙台店・10月）。 |
| 1980（昭和55）年 | | 中学・高等学校シュネーダー記念館完成（３月）。工学部機械工場および機械実験棟完成 |

| 年　代 | 歴代役職者 | 事　　項 |
|---|---|---|
| | | （３月）。榴ケ岡高等学校礼拝堂及び北校舎完成（８月）。泉校地総合運動場および管理センター完成（９月）。中学・高等学校文化部室完成（９月）。 |
| 1981（昭和56）年 | | 大学81年館完成（３月）。『東北学院報』発刊（東北学院大学学報を改称）（４月）。情報処理センター設置。総合運動場プール完成（５月）。榴ケ岡高等学校第１回海外研修（８月）。工学部体育館完成（10月）。 |
| 1982（昭和57）年 | 情野鉄雄 | 米国アーサイナス大学と国際教育交流協定を締結。第７代院長・第２代大学長に情野鉄雄就任（４月）。第11代理事長に児玉省三就任（４月）。図書館工学部分館完成（11月）。 |
| 1983（昭和58）年 | | 高校第二部廃止（３月）。榴ケ岡高等学校校舎増築完成（３月）。工学部礼拝堂完成（10月）。 |
| 1984（昭和59）年 | 児玉省三 | 新シュネーダー記念図書館完成（11月）。中学・高等学校第１回海外研修（７月）。 |
| 1985（昭和60）年 | | 大学整備計画案（教養部泉校地移転など）公表（１月）。旧シュネーダー記念東北学院図書館を大学院校舎に改装（11月）。幼稚園新園舎完成（12月）。 |
| 1986（昭和61）年 | | 創立100周年記念式典挙行。米国フランクリン・アンド・マーシャル大学と国際教育交流協定を締結。榴ケ岡高等学校北校舎増築完成（３月）。 |
| 1987（昭和62）年 | 宗方司 | 中学・高等学校長に宗方司就任（４月）。榴ケ岡高等学校長に半澤義巳就任（４月）。中学・高等学校体育館武道館完成（12月）。 |
| 1988（昭和63）年 | | 大学泉キャンパス完成、大学教養部を移転。榴ケ岡高等学校礼拝堂増築完成（３月）。幼稚園長に橋本清就任（４月）。 |
| 1989（平成元）年 | 半澤義巳 | 泉キャンパスに教養学部（教養学科人間科学専攻・言語科学専攻・情報科学専攻）を設置。幼稚園長に新妻卓逸就任（４月）。『東北学院百年史』発刊（５月）。 |
| 1990（平成２）年 | 武藤俊男 | 大学院工学研究科土木工学専攻修士課程を設置。 |
| 1991（平成３）年 | | 多賀城キャンパス１号館完成（３月）。榴ケ岡高等学校部室棟完成（３月）。中学・高等学校長に武藤俊男就任（４月）。中学・高等学校社会科教室完成（７月）。 |
| 1992（平成４）年 | | 大学院工学研究科土木工学専攻博士後期課程を設置。榴ケ岡高等学校柔道・剣道場および校舎増築完成（４月）。第12代理事長に情野鉄雄就任（６月）。 |
| 1993（平成５）年 | | 工学部２号館完成。中学・高等学校移転決定（３月）。 |
| 1994（平成６）年 | | 大学院人間情報学研究科人間情報学専攻修士課程を設置。 |
| 1995（平成７）年 | 倉松功 | 榴ケ岡高等学校を男女共学制に移行。第８代院長に田口誠一就任。第３代大学長に倉松功就任（４月）。 |
| 1996（平成８）年 | | 大学院人間情報学研究科人間情報学専攻博士後期課程を設置。榴ケ岡高等学校家庭科実習棟完成（２月）。榴ケ岡高等学校長に脇田睦生就任（４月）。榴ケ岡高等学校第１回ホームカミングデー実施。 |
| 1997（平成９）年 | 脇田睦生 | 大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻修士課程、アジア文化史専攻修士課程を設置。ドイツのヴィースバーデン大学と学生交換に関する協定締結。工学部運動場等新設。 |
| 1998（平成10）年 | | 幼稚園長を田口誠一院長が兼務（４月）。韓国の平澤大学校（５月）、中国の南開大学（11月）と国際教育研究交流に関する協定締結。高山セミナーハウス閉鎖。 |
| 1999（平成11）年 | | 大学院文学研究科ヨーロッパ文化史専攻博士後期課程、アジア文化史専攻博士後期課程を |

| 年　代 | 歴代役職者 | 事　　項 |
|---|---|---|
| | | 設置。大学設置50周年記念式典を挙行。青根セミナーハウス閉鎖。第13代理事長に田口誠一就任（４月）。 |
| 2000（平成12）年 | | 文学部英文学科、経済学部経済学科と商学科に昼夜開講制を導入。文学部二部英文学科と経済学部二部経済学科は募集停止。幼稚園長に長谷川信夫就任（４月）。土樋キャンパス８号館（押川記念ホール）・体育館完成（９月）。ホームカミングデー（同窓祭）開始。大学設置50周年記念事業（講演会・シンポジウム・シンボルマーク決定）を実施。仙台市宮城野区小鶴地区に中学・高等学校移転校地取得（３万１千坪）。 |
| 2001（平成13）年 | 出原荘三 | 文学部基督教学科をキリスト教学科に、経済学部商学科を経営学科に、教養学部教養学科言語科学専攻を言語文化専攻に改称（４月）。東北学院資料室開設（５月）。東北学院シーサイドハウス完成。 |
| 2002（平成14）年 | 杉本勇 | 工学部機械工学科を機械創成工学科に、電気工学科を電気情報工学科に、応用物理学科を物理情報工学科に、土木工学科を環境土木工学科にそれぞれ改称。大学院経済学研究科に経営学専攻修士課程を設置。中学・高等学校長に出原荘三就任。榴ケ岡高等学校長に杉本勇就任（４月）。 |
| 2003（平成15）年 | 赤澤昭三 | 第14代理事長に赤澤昭三、第９代学院長および同窓会長に倉松功就任（４月）。幼稚園長に長島慎二就任（４月）。東北学院同窓会100周年記念式典挙行（11月）。韓国の大仏（デブル）大学校と学術交流および教育協力に関する国際協定締結。 |
| 2004（平成16）年 | 星宮望 | 法科大学院・総合研究棟完成（２月）。第４代大学長に星宮望就任（４月）。中学・高等学校長に松本芳哉就任（４月）。大学院法務研究科法実務専攻専門職学位課程（法科大学院）を設置（４月）。榴ケ岡高等学校校舎増築（４月）。オーストラリアのニューサウスウェールズ大学と学術交流および教育協力に関する国際協定締結。カナダのビクトリア大学と学術交流および教育協力に関する国際協定締結。フランスのサヴォア大学と学術交流および教育協力に関する国際協定締結。 |
| 2005（平成17）年 | 松本芳哉 | 中学・高等学校新校舎完成（仙台市宮城野区子鶴）（１月）。東北学院同窓会館閉館（３月）。文学部史学科を歴史学科に、教養学部教養学科人間科学専攻、言語文化専攻、情報科学科専攻を教養学部人間科学科、言語文化学科、情報科学科に改組し、教養学部地域構想学科を新設。（４月）。 |
| 2006（平成18）年 | 久能隆博 | 工学基礎教育センター完成（３月）。工学部機械創成工学科を機械知能工学科に、物理情報工学科を電子工学科に、環境土木工学科を環境建設工学科に改称（４月）。榴ケ岡高等学校長に久能隆博就任（４月）。創立120周年式典挙行（５月）。ドイツのトリア大学と学術交流および教育協力ならびに学生交換に関する交流の協定締結。 |
| 2007（平成19）年 | 永井英司 | 中学・高等学校新寄宿舎完成。ハイテク・リサーチセンター完成（３月）。第10代学院長に星宮望就任（４月）。中学校・高等学校長に永井英司就任（４月）。秋田オープンキャンパス開催（７月）。多賀城市との連携協定締結式（11月）。 |
| 2008（平成20）年 | 平河内健治 | 第15代理事長に平河内健治就任（６月）。榴ケ岡高等学校体育館・管理棟完成（９月）。教養学部創設20周年記念式典挙行・同窓会設立。東北学院大学博物館起工式（12月）。 |

# 東北学院資料室規程

**（設置および名称）**

第１条　本院に、東北学院資料室（以下「資料室」という。）を置く。

**（目的）**

第２条　資料室は、本院に関する歴史を将来に伝承するとともに、「建学の精神」に関連する資料を収集・保存・展示し、本院の発展に資することを目的とする。

**（事業）**

第３条　資料室は、第２条の目的を達成するために、以下の事業を行う。

一　資料の収集、整理、および保存に関すること。

二　資料に関係する刊行物の編集および出版に関すること。

三　資料の展示および公開に関すること。

四　資料の閲覧および貸出に関すること。

五　資料に関係する情報の提供に関すること。

六　その他、必要と認められる事業に関すること。

**（運営委員会の設置）**

第４条　資料室の事業を運営するため、東北学院資料室運営委員会（以下「運営委員会」という。）を設ける。

**（運営委員会の構成）**

第５条　運営委員会は、次の者をもって構成する。

一　学院長

二　総務担当副学長、宗教部長、総務部長、総務部次長、総務課長

三　中学・高等学校副校長１名、榴ケ岡高等学校副校長、中学・高等学校事務長、榴ケ岡高等学校事務長、幼稚園教頭

四　法人事務局長、庶務部長、庶務課長、広報課長

２　運営委員会は学院長が招集しその議長となる。

３　運営委員会のもとに、必要に応じて実務委員会を設けることができる。実務委員は、運営委員会の議を経て委員長が任命する。

４　運営委員会の事務は、広報課が行う。

**（資料室の管理・事務）**

第６条　資料室の管理・事務は、広報課がこれを行う。

**（規則の改廃）**

第７条　本規程の改廃は、運営委員会の議を経て理事会が行う。

**附則**

本規程は、2001（平成13）年４月１日から施行する。

**附則**

本規程は、2003（平成15）年４月１日から一部改正施行する。

## 資料室利用案内

東北学院資料室は、広く一般の方々にも開放しております。

### 開室時間

**授業期間中**

月～金　10：30～16：00
但し、昼休み時間（12：40～13：40）を除きます。

土　　10：30～12：00
（日・祝祭日は閉室いたします。）

**長期休暇（春休み・夏休み・冬休み）中**

月～金　10：00～15：30
但し、昼休み時間（12：40～13：40）を除きます。
（土・日・祝祭日は閉室いたします。）

学校法人 東北学院

発行日　2008（平成20）年12月31日
編　集　東北学院資料室運営委員会
発　行　学校法人 東北学院
〒980-8511
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
TEL.022-264-6423　FAX.022-264-6478
http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/
印　刷　東北堂印刷株式会社